

## 第 3 回性教育研究会議と共同研究グループ「性教育学」の設立

—— 1960 年代 DDR における性教育の動向 (その 2) ——

池 谷 壽 夫

### 目 次

はじめに—— 第 3 回性教育研究会議について

1. 性教育の基礎
2. 学校における性教育実施上の諸問題
3. 親に関する活動
4. 性教育への医学の貢献

おわりに—— 本会議の成果と共同研究グループ「性教育学」の創設

キーワード：性教育，性的陶冶・訓育，性的教授，性教育研究会議，共同研究グループ「性教育学」

はじめに—— 第 3 回性教育研究会議について

第 3 回の性教育会議は 1965 年 5 月 13～15 日に Rostock で開催された。そのテーマは「社会主義学校における性教育」であった。ここには 60 人の教員，教育科学者，医師，心理学者，法学者が参加した。またこの会議には，東ベルリンに壁がつくられた 1961 年以後であるにもかかわらず，西ドイツからも性教育学者 Heinz Hunger, G. Ockel が出席していた (Grassel 1965, S. 762)。Grassel (1965) によれば，「この第 3 回研究会議は，共和国においてこれまでも孤立して働いている実践家と科学者を一堂に集めて，現行の活動に見通しを与え，将来性教育の活動を調整しつつ体系的に組織するための諸前提をつくるという目標をもっていた」(ebenda.)。

この会議では Rostock 大学哲学部学部長 Fritz Müller の挨拶の後，Grassel が研究団体のこれまでの研究活動について報告している (ebenda.)。これが Grassel (1966b) である。

ここで Grassel は，1962 年の会議で出された性教育に関する 9 つの提案 (Grassel/Baer 1962, S. 3) について，それがどこまで達成されたかを報告している。その提案とは次のようなものであった。あらゆるキャンペーン的なやり方を避けること，性教育と関連する根本問題を教員集団で解明すること，教員養成と教員継続教育において，性教育の諸問題を考慮すること，

必要な性教育文献と必要な教材を教員用につくこと、 出る予定の教育プランにおいて性教育の問題を考慮すること、 教員・教育指導者の [性の——引用者] 危険性について示すこと、 性教育の諸問題をとくに考慮して、学校による教育的プロパガンダを促進すること、 すべての社会機関を一般には親の教育に向け、そして特殊には性教育に向けて組み入れること、 青少年組織（婚約中の男女や夫婦のサークル）に結婚能力と家庭教育の諸問題にもっと注目させること。

この 9 項目に対して Grassel は、次のように総括している。 については、「この勧告はその時にもみんなに受け入れられ、それ以来遵守されるだけでなく宣伝された」。 についてはあまり前進していない。「これは一部には、公的になおしばしば、性教育を受け入れるのに恥ずかしさがあるせいである（ないしは最近までそうであった）」(S. 711)。 その特徴的事例として、Grassel は、『教育学百科事典 (Pädagogische Enzyklopädie)』第 2 版においてすらまだ Geschlechtserziehung の見出し語がみられず、ただ「性衛生 (Sexualhygiene)」が語られているだけであることを指摘している (S. 711f.)。

については、それがまだ個々人の良心と知識に委ねられたままである。 については、これまで重要なチャンスが生まれていないが、自分たちの研究サークルのさまざまな同僚によって、承認に値する貢献がなされている。 また 2 つのスライド—— Brückner が 10 歳からの子ども向けのシリーズとして開発したものと、Grassel が 4 ~ 10 歳の年齢段階向けに作成したもの——、生殖と出産に関する 3 部からなるドイツ教育中央研究所 (DPZ) \* の映画、ドイツ映画会社 (DEFA) が制作した映画「異性との出会い」(4 部) が成果として挙げられている。

\* Grassel (1965) では、ドイツ教材中央研究所 (DZL) 3 部からなる映画が紹介されているところからみると、これは DZL かと思われる。

については、性教育の諸問題を予定されている教育プランのうちに定着させようという努力はほとんど成功しなかったし、 についても、まだ十分になされていない。 については、親向けの説明書を Brückner や Grassel が作成し試行している。 では、マスコミを性教育に動員する努力は最初の成功を収めた (テレビ) \*。最後に については、青少年組織に結婚準備の問題に注目を向けさせるという提案は、少なくとも、『Junge Welt』誌上で行われた討論「内密に (Unter vier Augen)」\*\* で考慮され、性教育の活動に対して意思疎通が活発になされた。そして最後に、「これまでの仕事を締めくくり、それと同時にわれわれの教員に十分な材料をもたらすこと」(S. 712) が今会議の目標であると述べられている。

\* ドキュメンタリー映画「コミュニストは SEX がお上手? (Liebt der Osten anders? - Sex im geteilten Deutschland)」(2006 年) で、DDR で 60 年代初頭にテレビで性教育に関する討論が行われたことが紹介されている。

\*\* この約 3 年つづいたシリーズは、その後 Trummer (1966) としてまとめられ出版されている。

この会議では、報告は 4 つのグループに別れて行なわれた。すなわち、「性教育の基礎」、 「学校での性教育の実施の諸問題」、 「親に関する活動」、 「性教育への医学的貢献」の 4 グ

グループで、報告者と報告タイトルは以下の通りであった。

第1グループ	
Bittighöfer, Bernd	男女関係についてのマルクス主義倫理学と友情, 愛, 結婚における倫理的に価値あるパートナーシップへと青少年を社会主義的に訓育するための倫理的諸原則
Grassel, Heinz	性教育の前提, 条件および効果
Borrmann, Rolf	性的陶冶・訓育の対象, 任務と形成
第2グループ	
Grassel, Heinz	下級段階での性教育の任務・問題と性教育づくり
Baer, Heinz-Werner	生物授業における性教育
Sende, Johannes	第4~8学年における性的教授での性的関心とその考慮
Bach, Kurt R.	Hohenmölsen・Erich-Weinert 上級学校での実践活動の諸経験
第3グループ	
Brückner, H.	子ども期に性教育の任務を果たす際の学校と家庭の協力のために現在どのような可能性と困難があるのか?
Grassel, Heinz	親に関する活動——成長期にある世代の性教育に対する1つの貢献
Wolf, D.	自分の子どもの性教育に対する親の態度
第4グループ	
Neubert, Rudolf	性教育学に対する医学の貢献
Bretschneider, W.	早期の性交と早期妊娠の危険性
Paul, Elfriede	結婚への準備としての性教育

会議後、これらの報告のほとんどが Rostock 大学の紀要, *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*. 15. Jrg, *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, 1966 に掲載されている。そこで、本稿では4つのグループを中心にしてここに掲載された論文を取り上げ、この会議での議論と成果をまとめていくことにしよう。

\* なお、本稿でも池谷 (2011c) と同じく, geschlechtliche Aufklärung, sexuelle Aufklärung については「性的啓発」、geschlechtliche Erziehung, sexuelle Erziehung については基本的に「性教育」、sexuelle Bildung und Erziehung は「性的陶冶・訓育」、sexuelle Belehrung は「性的教授」、Sexualpädagogik は「性教育(学)」ととりあえず訳し分けておく。

## 1. 性教育の基礎

### (1) Bittighöfer の性教育論

ドイツ社会主義統一党中央委員会付属社会科学研究所の Bittighöfer (1966) は、Bittighöfer (1965) とほぼ同じ趣旨で、「統一的社会主義教育制度に関する法律」(1965年)や「青少年コミュ

ニケ」(1963 年) \*を踏まえて、社会主義性道徳の基礎付けを「男女間のペア関係が人格発達および社会的実践にとってもつ倫理的な意味」という視点から試みている。

\* これらについては、池谷 2011b, 参照。

Bittighöfer にとって、社会主義性道徳の原則は、第 1 に、「女性の尊厳、同権および同価値性の尊重と承認」(S. 723) である。両性はその生理学的・心理学的体質という点ではまったく異なるが、しかし達成能力 (Leistungsvermögen) という点では「同価値性 (Gleichwertigkeit)」をもつ。この同価値性の承認から、女性の同権の承認が導き出される。

Bittighöfer によれば、女性の同権の承認とは次のことを意味する。すなわち、第 1 に、社会主義的共同体関係の土台の上では、「男性と女性は社会的な生活づくりのすべての領域において同権を持ったパートナーとして活動する」こと、第 2 に、「女性の倫理的尊厳を、何よりも母性への天職のゆえに保護し守り、女性に特に尊重して接すること」、第 3 に、「女性が性生活関係においても一般的な生活関係においても男性の客体ではないこと」、第 4 に、「女性は結婚においても、自分の個性に応じた生活づくり、生存の実現および愛における幸福に対して男性と同等の権利をもつこと」、第 5 に、「両パートナーは同時にギブ・アンド・テイクするものであること、そして何よりも女性は自分の母性に関して共同決定すること」(S. 724) である\*。

\* ここで注意すべきは、女性の「母性」が天職として位置づけられ、母性の保護が強調されている点である。「母子保護と女性の権利に関する法律」(Gesetz über den Mutter-und Kinderschutz und die Rechte der Frau. Gesetzblatt Nr. 11, 1950) の前文でも「幸福な母性」が強調されている。

そして、この男女の同価値性と同権から、社会主義性道徳の第 2 の原則が導かれる。それが、「両性間の関係における社会主義道徳の行動規範としての、相互尊重、誠実さと信頼、忠実と責任意識、自制と思いやり」(ebenda.) である。

Bittighöfer は、この 2 つの原則から、性教育では「青少年を異性との出会いへと準備させる際に、彼らの性についての正確な知識を適時に伝達することを始めから倫理的な教育と結びつけること」(ebenda.) が必要だと考える。すなわち、生物の授業で「セクシュアリティの生理学に関する正確な知識の伝達」だけでは不十分であり、若い人を思春期に彼らを悩ます感情にうまく対処させるには、「性倫理的訓育 (die sexual-ethische Erziehung)」(ebenda.) が必要だということである。

これに関わって、青少年の倫理的・社会的成熟の問題と、婚前性交と早婚の問題が検討されている。まず について。Bittighöfer によれば、「親密な性的関係を受け入れる前提」でもある「倫理的成熟」が達成されるのは、「青少年がわが社会主義学校で伝達された教育財を自分のものにした時であり、青少年に課された教育要求が自分の比較的確固とした信念になっている時、および自分の実践活動から適切な人生経験のものにして、自分の行為に対する自分に属する責任を見極めて引き受け、またこの枠内で自主的な決定をすることができるようになる時」(S. 726) である。これに対して、「社会的成熟」とは、「社会における権利・義務・責任を実際にかつ求め

に依じて行使すること」である。この意味では、社会的成熟は公民としての地位を特徴づけるものであり、青少年は18歳で公民として自立する。しかし、世界観的・政治的・道徳的意識ならびに適切な人生経験の水準からすれば、倫理的成熟にまだ達していないことはまれではない。

この見地から、Bittighöferは、今日の社会主義的諸関係の下では、たんに職業教育を終えることで達成される「自立」を倫理的および社会的成熟の決定的基準にすることができないと考える。むしろ「高い専門的な資質と包括的な普通教育を獲得することが、われわれのところでは1つの重要な社会的委託であり、そしてこの委託を青少年が意識的に引き受けることが、彼らの倫理的および社会的な成熟の一表現である」(S. 727)とする。

以上の検討から、Bittighöferは、Bretschneider (1956)が性的発達の加速化に伴って生じた性的成熟と精神的成熟との間のギャップを「危険ゾーン」ととらえること\*に反対する。この2つの成熟過程の間の時期が「危険ゾーン」かどうかは、青少年の発達段階そのものから生じるものではない。「私は、われわれの社会主義の発達条件下で青少年期を危険ゾーンの拡大として特徴づけることは正しくないと思う」。Bittighöferによれば、青少年の発達と行動はこの段階においてもまずもって社会的に決定されているから、「危険ゾーン」は青少年期そのものにあるのではなく、「二重道徳を持ち、性的刺激を与える、展望のない、人間の自己疎外を伴う資本主義社会 [の問題]」(ebenda.)のせいなのである。

\* Bretschneiderの「危険ゾーン」と彼の性教育論については、池谷(2011a)参照。

について。Bittighöferは「時期尚早の性交(vorzeitiger Geschlechtsverkehr)」と「婚前性交(vorehelicher Geschlechtsverkehr)」を区別し、前者をこう定義する。「若い人がたしかにすでに性機能への生物学的能力を持っているが、しかしまだ真の愛情表現としての身体的結合の真の人間の体験への、および性的接触と結びついた社会的責任を果たすことへの人格的成熟をもっていない時点で、親密な異性愛的な接触をすること」(S. 727)。Bittighöferによれば、時期尚早の性交は問題だが、倫理的成熟後の婚前性交を道徳的に禁止することは幻想である。Borrmann(1966a)の分析によれば、多くの若い人は18歳までに性交し、青少年の多数は婚前の性的節制に対する要求を時代遅れだと拒絶しており、男女青少年の約80%は将来の結婚パートナーに対して未経験であることを期待していないからである。

では早婚を勧めるべきか？Bittighöferはこれに反対する。それは、「第1に、若い人には——真の愛情体験への彼らの倫理的成熟にかかわらず——集中的な学習のこの時期に、多様な文化的・スポーツ的な体験、交際と団欒を求めるこの時期にすでに親の義務を果たすことは、青少年に合わない法外の重荷であるからである」。そして第2に、「西ドイツの諸事情にはるかに優っているあらゆる大きな社会的達成にもかかわらず、われわれの発展の現況では、まだいたるところ直接的な生活・労働条件においてならびに社会的な制度・サービス等々においては、まだ職業教育過程にある若い人の結婚に最適な発達可能性を提供する前提条件が与えられていないからである」(S. 728)。むしろ男女は、「婚前性交が道徳的に認められ彼らにとって人格的・倫理的に意

味あるものになるのは、それが共通の関心と見方ならびに長期の恋人関係 (Freundschaft) の間に実証された誠実な思いやり (Füreinander) のうえに深く抱かれた愛情にもとづいている時だけだ (ebenda.) ということを学ぶべきなのである。

最後に、Bittighöfer は性教育 (学) に関するいくつかの方法上の視点を提起している。1 つは、セクシュアリティの節制ではなくその肯定から出発することである。とはいえ、Bittighöfer は無条件の肯定を考えてはいない。倫理教育は、「若い人に、満たされた愛の条件を知ることにもとづく自制と自己保持が彼らにとって損失ではなくて利得であること」、「愛への倫理的成熟の達成とともにようやく、愛の全幸福を体験し享受できること」を認識させねばならない。この意味において、倫理的に価値あるパートナーシップへの教育は、「結婚と家族の意義に対する深い理解」を喚起し、「社会主義的結婚・家族関係の実現」に至らねばならない (S. 729)。もう 1 つは、性関係にありうる危険や困難をことさら描く「威嚇方法」を用いないことである。

## (2) Grassel の性教育論

Grassel (1966c) はまず、「成長期にある世代の性教育」を「社会主義社会における訓育の 1 つの統合的な構成要素」としてとらえ、その目標を「子どもと青少年を異性との出会いへと準備させること」(S. 715) に置く。そして、この教育学の任務を、心理学の立場から補強すべく、約 3000 人の調査 (インタビュー、筆記のアンケート、グループ会話、参与観察など) から、まず「性的発達の過程」を次の 5 段階にまとめている (S. 716)。

### 第 1 段階 (2~7 歳)

自分の身体との自然に制御された付き合いの発達、男女の身体的特殊性と特徴についての最初の知識の獲得、親と家族構成員の共同生活についての知識の獲得。

### 第 2 段階 (8~11 歳)

積極的な関心により生殖に関する主として客観的な情報の獲得、知識を整理する試み。

### 第 3 段階 (11~15 歳)

自分の性と異性の特殊性に関する知の完成と整理。男女関係に関する知。この関係の「秩序」の探求。

価値を規定する「行動モデル」の構築。

快楽を与える身体刺激の体験。

比較的持続した最初のペア関係の開始。

### 第 4 段階 (15~18 歳)

承認された規範に依って「性のコントロール」を強固にし、一部は実行すること。

基本的な心理的分担をしてペア関係をつくること。

親密な経験の獲得。

### 第 5 段階 (18 歳以降)

性コントロールを安定化させること。安定したペア関係をつくること。

知識獲得の終結。

自分の子どもに働きかける能力の獲得。

### 第3回性教育研究会議と共同研究グループ「性教育学」の設立

次に、性教育の現況が、生徒・学生・大人の性情報に関するアンケート調査から明らかにされている。それによると、青少年の啓発は過去に比べて改善されてはいるものの、まだ十分だとは言えない。例えば、子どもの出自（子どもがどこから来るのか）に関する知識をみると（表1）、6歳までに子どもはこの出自について質問してくるのに、その年齢までにきちんとした知識を教えられていない。しかし、大人や学生に比べると、今日の子どもは、この情報をより多く与えられている点では改善されている。

また、親による性的啓発についてみると（表2）、親は以前よりも自分の子どもの啓発に関与しているし、女子のほうが男子よりも多く親によって啓発されている。Grasselによれば、これは一方では、息子よりも娘により多くの不安を抱いていることによるものであり、他方では、母親のほうが自分の娘の啓発を、息子の場合よりももっと専門的に行うことができることによる。しかし、父親が関与していないので、息子はしばしば親からの啓発がないままになっている。

また、学校による啓発も年齢が下がるにつれて、啓発される割合が増えている（表3）。

さらに性の情報源をみても（表4）、学校による啓発が年齢の低下につれて増えている一方で、

表1 子どもの出自について情報を得た年齢（%）

年 齢	生 徒	学 生	大 人
5 歳	5.0	4.2	5.0
6	20.9	11.5	9.3
7	30.7	19.4	14.8
8	46.0	30.4	26.9
9	55.2	40.0	31.6
10	70.5	52.6	57.7
12	87.8	72.4	77.0
14	100.0	78.7	93.0
残りの回答：わからない			
n	522	454	256

\*二重線は、子どもの出自に関する情報提供をすべき上限年齢を示す。（出所：Grassel 1966c, S. 716.）

表2 啓発における親の関与（%）

親は啓発したか	生 徒			大人全体
	女 性	男 性	計	
はい	69.1	44.1	56.7	39.2
一部	2.5	8.7	5.7	4.8
いいえ	28.5	46.6	37.3	55.9
無回答	-	0.6	0.3	0.1
n	162	161	323	781

（出所：Grassel 1966c, S. 717.）

表3 学校が啓発に関与する割合 (%)

学校は啓発したか	生徒	学生	教員	親
はい	63.1	65.0	38.0	29.4
少し	-	7.8	-	-
その他肯定的回答	5.3	-	9.6	7.0
いいえ	31.6	27.2	52.4	63.6
n	531	532	365	371

(出所 : Grassel 1966c, S. 717.)

友だちや本などの「かくれた共同教育者」が減ってきている。

しかし、性教育への教員の準備状況を見ると(表5)、生物の教員は60%が準備をしているものの(「はい」と「少し」の合計)、他教科の教員では38%にとどまっている。Grasselは、学校では相変わらず性教育は生物科に限られていて、性教育の訓育的側面は十分ではないとしている(S. 717)。

表4 啓発の主要な情報源 (%)

情報源	生徒	拡大上級学校 9~12年生	学生	大人
親, 親戚	28.2	32.6	10.0	15.9
学校	33.3	22.7	7.9	11.2
本	24.8	25.1	27.6	32.4
友達	6.0	12.3	45.3	32.5
その他	7.7	7.3	9.2	8.0
n	291	294	142	432

(出所 : Grassel 1966c, S. 717.)

表5 性教育の任務への教員の準備 (%)

準備したか	全科目の教員	生物科教員
はい	27	50
少しは	11	10
いいえ	54	30
無回答	8	10
n	136	

\*このデータは、Blome, N./Popp, E. (1964) からのもの (Grassel 1967)。

(出所 : Grassel 1966c, S. 718.)

### (3) Borrmann の性教育論

Jena/Friedrich Schiller 大学教育学研究所の Borrmann (1966b) は、「性的陶冶・訓育」の実施に専門家の小さなサークルが尽力してはいるものの、まだ多くの人は、性教育の実施が社会主



義的人格の発達にとってきわめてわずかな意義しかないという意見を主張しているようなので、こうした見解と闘うことが重要だとして (S. 733)、性的陶冶・訓育の対象や任務をあらためて論じている。

Borrmann によれば、性的陶冶・訓育が統一的な陶冶・訓育過程の要素であるとしても、性的陶冶・訓育は特定の対象を持つ。それは「セクシュアリティに対する人間の自然的な態度の発達および、自分の性と異性との関係において明らかになる社会主義道徳の規範にふさわしい性行動の形成」(S. 734) である。だが同時に、Borrmann は対象を不当に狭隘化してはならない、と言う。「例えば、言葉の極めて狭い意味での性的なものに限定することや、もっぱら親密な性的な交際のテクニックとそれへの人々の準備を性教育の対象としてとらえることは誤りである」(ebenda.)。

性的陶冶・訓育の目標は、「性行動においてモデルとなる人間」である。より具体的には、「身体性の生物学的法則を知りそれを過小評価しないが、しかし異性との関係においては社会主義道徳の規範によって導かれる人間であり、自分の性 (Geschlechtlichkeit) と異性に対する清潔な態度を率直に表明し、否定的な影響に対しては断固として不寛容に反対する人間」、あるいは「知識、洞察および習慣によって得られた行動の確実さ・安心——これは自分自身、パートナー、将来の生活と社会に対する責任意識から出てくる——にもとづいた自制によって際立っている人間、愛の能力があり、結婚と社会主義家族づくりとの用意ができている人間」(ebenda.) である。

そして Borrmann は、この目標から出てくる性的陶冶・訓育の課題を3つ挙げている。すなわち、「知識と認識の体系の伝達」、「教育を支援する環境づくり」、「倫理的決定と正しい行動への能力付与」(ebenda.) である。まずは「性的教授」である。これには、「生殖器の解剖と生理学、性的な発達・成熟の生理学的過程、繁殖と生殖 (Fortpflanzung und Zeugung)、胎児の発育、妊娠、出産と性生活の衛生、避妊、家族計画、人間のセクシュアリティと性愛の本質、ならびに異性との関係の倫理的基礎および社会主義的性道徳の規範」(ebenda.) が入る。では、家族、学校、青少年・子ども組織および企業を、教育者によって意識的につくられる、社会主義的同胞関係の訓練分野とすることが強調される (ebenda.)。では、「極めて早期の子ども期からの、意志の強さ、自己訓練 (Selbstzucht)、自制への教育」や「責任感情の深化、感情生活を気分や支離滅裂をこえて高めること、きちんとした社会的コンタクトをとり育む用意を育成すること、社会的義務の意識化、人間の尊厳、自己価値の認識と意識的な規律への教育」(S. 735) が継続的になされねばならないとされる。

性的陶冶・訓育の時期の問題については、「幼児に始められ、客観を強調した事実伝達が12歳である程度完結されるが、性的陶冶・訓育は大人のもとでようやく終わる」(ebenda.) とされる。またその担い手として、Borrmann は青少年の社会主義的陶冶・訓育に関与する者すべてを挙げている。「青少年の社会主義的陶冶・訓育に関与している者は皆、性的な陶冶・訓育をする権利ばかりか義務すら持っている。それゆえすべての教育者が性的陶冶・訓育づくりに関与しなければ

ばならない。親、幼稚園教員、教員、教育指導者、ピオニール指導者、親方 (Lehrmeister)、人民軍の下士官と士官、そしてなによりも民主的な公衆 (Öffentlichkeit) (S. 736)。

これらの教育者は直接的にも間接的にも青少年に影響を及ぼすことができる。直接的には、「知識を伝え、要求を意識させ、展望を与え、助言し批判し、現存の [男女——引用者] 関係に直接働きかけること」であり、間接的には、「教育全体を作り出すこと」、あるいはまた「集団の教育潜勢力を効果的にする、並行しての教育 (学) 的な働きかけを組織化すること」、そして「青少年を決定と行動へと押しやる条件、状況と機会を作り出すこと」(S. 736) である\*。

\* なお、直接的関与と間接的関与については、Borrmann (1962) も参照。

この機会を作り出す条件として、Borrmann が挙げるのが「首尾一貫した男女共学づくり」である。まず「両性の共同の陶冶・訓育」(男女共学) は「異性を知り理解しあうようになるための好都合な条件」を作り出すし、また「遊び、学習、労働で異性との交際に早くから慣れることを通して、リラックスした関係を引き起こす。抑制は自然になくされ、異性に関する誤った観念はたえず現実に即して訂正される」(S. 736)。そして最後に、Borrmann は性的陶冶・訓育の特別な方法などはないことをあらためて指摘している (S. 737)。

## 2. 学校における性教育実施上の諸問題

### (1) Grassel の下級段階性教育構想

Grassel (1966d) は、学校は第 1 学年において体系的で継続的な性教育を始めねばならないにもかかわらず、奇妙にもこれまでほとんどすべての性教育学者は、下級段階を除いて性教育の諸問題を中級・上級段階で扱ってきたことを問題にしている (S. 739) \*。

\* 下級段階での性教育の扱いをめぐる雑誌《Biologie in der Schule》誌上で 1963 年～68 年に激しい論争が行われたが (Grassel 1967, S. 185)、これについては別稿で論じたい。

Grassel によれば、性教育は家族と幼稚園で始まり、学校の下級段階では継続して体系的に続けられ、第 4 学年で最初の終結をみななければならない。この見地から、Grassel は以下のような第 1～4 学年の教授プランを作成している (S. 739f.)。その際、教員は子どもの質問に答えることに自己限定せずに、むしろ子どもに発達過程で生じてくる問題と疑問に、能動的に準備させることが必要であるという。そして第 4 学年までに必要な基本的知識として、「男性の精子、女性の卵子、出産、妊娠、子宮、膈、臍帯、胎児の栄養、母胎での発育、出産過程、産後、流産、生殖器官 (男性・女性生殖器の位置と構造)、卵巣、卵子の移動、陰茎、精子と卵子、受精過程、卵割、胚、臍帯と胎盤」を挙げている。

第1学年

子どもの出自に関する問いに答えること。それに対して、子どもの生活範囲に見られる動・植物界からの実例。

家族における子どもの準備と誕生。

私たちは家族（親と子どもとの関係）。

私たちはすべての女性、とりわけ母親になる人を助ける。

出産に関する問いに答えること。

第2学年

母胎での子どもの成長（それに対して、子どもが観察できる動物界の例、植物界からの例も）。

私たちの親が私たちのためにすること——（とくに、母親が子どものためにすること：妊娠、出産、授乳……）

私たちは私たちの家族に贈り物をする。なぜ男子は女子を助けるのか。

第3学年

母胎での子どもの成長。

妊娠の経過。

胎児の栄養。

親の愛（動物界の世話の例も）。

男子と女子は互いにどう振る舞うのか。

第4学年

人が互いに愛する時（親の愛、動物愛、夫婦愛）。

子どもがどのようにできるのか。

子どもに父親がいない時。

Grasselによれば、この教授プランの試行段階で次のことが明らかになった。1つは、多くの教員は知識と勇気があるにもかかわらず、とくに身体器官を言語表現する際に不安や気後れを感じていたことである。そこでスライドが作成された（S. 739）。第2に、8～9歳の子どもグループには基本知識がすでにあったが、その程度はまちまちであった。そこで必要となったのは、「この現存の知識を整理し補完し、きちんとしてみんなの手に入るようにすること」（S. 740）であった。さらに、たいていの子どもの出産に関する誤った観念を持っていたことがわかった。その最たるものが「帝王切開論」と「切り取り理論」であった。前者は出産に際して医師は「お腹を切り開かねばならない」というものであり、後者は「子どもは肛門から切り取られる」というものである（ebenda.）。なお、Grasselは学校と家庭の協力を促進するために、教員が親への活動をしやすくする特別な「説明書」を開発している（Grassel 1966f, 1966g, 1966h, 参照）。

## (2) Baer の生物教授構想

Baer (1966) 論文は、ほぼ Baer (1962) と同趣旨のものである。Baer は 1959 年の生物教授プラン\*を以前のそれと比べて著しい進歩だと評価している。「これでもって初めて、すべての生徒は国家の指令にもとづいて、個人的・社会的生活のひじょうに重要な領域について学校の教えを受けることになる」(S. 741)。

\* 10 年制普通教育総合技術上級学校の生物科の教授プランは、第 9 学年の「人間の解剖と生理学」の篇で、「人間の生殖器と個体発生的発達」という教材領域を取り扱うことにしている。ここでは、「男性生殖器 (精巣, 輸精管), 女性生殖器 (卵巣, 卵管, 子宮), 月経, 性病の指摘, 青少年期のセクシュアリティの問題の指摘, 男性の生殖細胞と女性のそれ, 受精と最初の卵割段階, 胎児の発育, 人間の個体発生に及ぼすレントゲン照射の影響」を扱うことが求められている (Baer 1966, S. 741)。

しかし同時に、その教授プランの問題点として、3 点が挙げられている。第 1 に、「出産過程、乳児の発達と世話、子ども・青少年の成長の取り扱い」が必要なのにそれが扱われていないし、「生殖器の外的部分の取り扱い」もはっきりと求められていない (ebenda.)。第 2 に、「青少年期の [セクシュアリティの——引用者] 諸問題の指摘」という表現も一般的すぎて精密化されねばならない (S. 742)。第 3 に、テーマの時間的配列の問題がある。「生物の授業における性教育に役立つ諸テーマの取り扱いの時間的な配列が生徒の発達事情に合っていない」(ebenda.) ことである。性的成熟の加速化の結果、生徒のセクシュアリティの諸問題への関わりをもっと早い時期に行なう必要がある。「それゆえこの教材を最初に教えるのはすでに第 4 学年か第 5 学年で基礎的な「保健 (Gesundheitslehre)」の枠内でなされるべきであろう。その後、第 7 学年ないしは第 8 学年で、生殖器の解剖と生理学の取り扱いならびに衛生の総括的な取り扱いが行われ、これに続いて就学期間の最後の第 9 ないしは第 10 学年で、総括的な概観と仕上げがなされ」(ebenda.) ねばならない\*。

\* Baer 1962, S. 39 も参照。

この観点から、Baer は、Grönke、とくに Kirsch の指導のもとに Potsdam 教育大学生物教授学部門が作成した、第 5 学年から始まる「生徒が獲得すべき人間の性生活に関する知識についての構想」\*を批判的に検討している。Kirsch らの構想では、授業の重点は第 5 学年と第 8 学年に置かれている。すなわち、第 5 学年では、人間での受精、母胎内での子どもの発育、出産、新生児に関するいくつかの事実が扱われ、第 8 学年では、生殖腺、人間の性の仕組みと個体発生的発達、男性生殖器と女性生殖器、月経サイクル、交尾・性交と受精、出産前の胚の発育と妊娠、出産、新生児、青少年期における両性の関係が扱われる。また、授業外の活動で、一部は女子と男子に分けられて、第 6 学年と第 7 学年で人間の発達段階としての性的成熟、生殖器の衛生が扱われ、第 8 学年では、性病と乳ガン・子宮ガンを扱う医師による授業外の催しが予定されている。さらに、第 10 学年では、医師による授業外の催しとして、青少年期における性的関係、妊娠中絶および健康な出産調整・産児制限の諸問題が取り扱われる (S. 742)。

### 第3回性教育研究会議と共同研究グループ「性教育学」の設立

\* ここで Baer は、Kirsch の文献を明示していないが、Kirsch (1962, 1964) でその提案がなされている。Kirsch の構想は、その後 Kirsch (1968) で体系的に展開される。

Baer はこの構想を現行の教授プランに比べて大きな進歩であると評価し、この提案が人民教育省のもとに創設される共同研究グループ「学校における性教育」（後述の共同研究グループ「性教育学」）のことであろう——池谷）で根本的に審議すべきであろうと考えている。しかし同時に、次の2点で問題だとして批判している。1つは、重要な領域が授業外に設定されたり、医師に委ねられていることである。「教材構成の一部も、ひじょうに大きな領域を授業外活動へ委ねることも、また重要な教材領域を医師に割り当てることも、極めて問題だと思われるし、学校の責任を尻込みしているように思われる」(S. 742)。2つ目に、教員主導のプランになっており、生徒の主体的関与が軽視されている。「ほとんどもっぱら教員による提供のかたちで教材の取り扱いを求めることは、生徒をただ受容的な学習態度へ余儀なくさせるもので、われわれには、うってつけのチャンスに応じるものではないように思われる」(ebenda.)。

この第1の問題に関わって、Baer は生物の教員の特別な責任を次の点から強調している。第1は、「生物の教員は、公民科教員と並んで、教授プランによって性教育を授業で行うよう義務付けられている唯一の教員である」こと。第2に、生物の教員は「動物と人間の解剖と生理学」の分野で養成されていることからして、「生殖器の構造と機能に関する生物学的に厳密な知識を最もうまく伝達することができる」し、動物の生殖と人間のセクシュアリティとの質的な違いについても、系統発生的な知識にもとづいて説明することができる (ebenda.)。

ここから、Baer は生物の教員の任務を3点挙げている。第1の任務は、「生物の教員は教育協議会\*において性教育の諸問題を取り扱うことに努力して、学校において恒常的な性教育プランをすべての同僚、特に学年主任と一緒に作成する」ことである。第2に、生物の教員は「親の会でどの学年でも一度ならず継続的に、性教育の現状について報告がなされるように、働きかける」こと。第3の任務は、教員の継続教育の催しや親セミナーにおいて、同僚と親が性教育の能力を持つようにさせることである (ebenda.)。

\* 教育協議会については、池谷 2011c, p. 46 参照。なお、Baer はここで Rostock 大学教育学研究所・生物方法学部門の2年前の調査結果を示し、生物科教員の役割の重要性を強調している。それによると、約150の学校のうち57%の学校では、これまで教育協議会で性教育の諸問題を話し合ったことがないし、25%の学校では、生徒が引き起こした否定的な問題に取り組んだだけであった。教育問題を議論する際に計画的に性教育の諸問題を教育協議会で扱っていた学校は約10%であった (S. 742)。また、Baer は、Baer (1962) で第5～9学年での生物の授業教材と結びついた性教育の可能性を論じていたが、その可能性は今日もなおすべての生物の教員によって十分に利用されていないと言う (S. 743)。

最後に、Baer は、現行教授プランで取り扱われる「人間の生殖器と個体発生的発達」篇について、5時間からなる教材構成案を呈示している (ebenda.)。

- |                                |
|--------------------------------|
| 1 時間目—— 男性生殖器の解剖と生理学           |
| 2 時間目—— 女性生殖器の解剖と生理学           |
| 3 時間目—— 男性と女性の生殖細胞, 受精と最初の卵割段階 |
| 4 時間目—— 胎児の発達と出産過程             |
| 5 時間目—— 人間のセクシュアリティ            |

すでに Baer (1962) で, Baer は 4 時間の構成案を示していたが (池谷 2011c, 参照), ここでは 5 時間目に新たに「人間のセクシュアリティ」が付け加えられている. 1 時間目から 4 時間目までは Baer (1962) とほぼ同じ内容であるが, 3 時間目では, Baer は, この時間の最も困難な部分, すなわち, 受精過程に関する必要な知識を以下のように提示するとしている (ebenda.). 「男性生殖器と女性生殖器の解剖と生理学の知識から, われわれは人間での精子の伝え方と受精過程を推論することができる. 男性の陰茎の構造が女性生殖器の膣への挿入と相互の緊密な結合を可能にする」(S. 744). また, 「子宮における胎児の出産成熟状態までの発育」が扱われる 4 時間目では, これは現行教授プランにはないが, Baer は「どの生物の教員もホルモンの働きによって操作され筋肉運動によって引き起こされる出産過程をこの時間の教材へと組み入れるべき」だと考えている. また, 特に妊娠中の女性の大きい仕事と努力を知ることは, 生徒を母親になる人に対する正しい行動へと容易に導くという点で, 「この教材はそれゆえ, 女性と母親の尊重へと教育するのに最もよく適している」(ebenda.) とされる.

なお, Baer (1962) と同じく, ここでも Baer は北欧諸国, とりわけスウェーデンで行なわれている「性交 (Begattungsakt) と避妊」のテーマの取り扱いに触れて, あまり歯切れのよくない表現でこう述べている. 「われわれは最後の学年でのこのような教授をまったく適切だと考える. このような教授は行うことができるが, しかし無条件に行われる必要はなく, 学年主任によって行われることもあるし, あるいは授業外教育の枠内で医師によって提供されることもある」(ebenda.). しかし, Baer にとってはこれよりも無条件に重要で必要なのは, 青少年に, 「とりわけ自分自身と異性に対する責任意識を呼び起こし促進すること」(ebenda.) のほうである. それは, Baer によれば, 婚前性交は, とりわけ女子に, 大いに妊娠のおそれがあるゆえに, ひじょうに重い負担を与えるし, その結果望まない子どもに対する不安が心理的に極めて不利となる影響を及ぼすことがあるからである.

5 時間目では「人間のセクシュアリティ」の核となる知識が 3 つ挙げられている. 1 つは, 動物のセクシュアリティと人間のそれとの違いである. 動物では交尾は発情期においてだけ行われ, ただ生殖衝動の充足, したがって種の維持に役立つだけであるのに対して, 「大人の人間は, 自分の精神的能力と意志力の高次の発達にもとづいて, 自分の生殖を社会的な欲求に従って, それゆえまた自分自身の欲求に従って調節することができる」. 2 つめは避妊の問題である. 「大人の人間は新たな生命を作ろうとせずに性交するならば, 受精能力のある卵子への精子の侵入が妨害されねばなら」ず, 「そのために, 卵成熟の生理学的なリズムが考慮され, 機械的ないしは化学的に

精子が女性生殖器の内部へと侵入することを妨ぐ人工的手段が用いられる」。しかし「この2つの可能性は決して100%の安全を提供するものではない」(ebenda.)。3つ目に、最終的に青少年に次のことが勧められる。「パートナーと長い人格的な共同生活が存続して、パートナーをしっかりと自分の将来計画へと組み入れ生涯一緒に過ごそうというまじめな努力へとついに至る時はじめて、性交を受け入れること」(ebenda.)である。また、生物学的成熟と並んで完全な社会的成熟が獲得されねばならないとして、「子どもの養育と教育のための前提がつくられ、それによって社会に普通以上の負担をかけないこと」(S. 744f.)が指摘されている。

最後に、Baerも性教育における男女共学の必要性を強調する。「性教育の問題を取り扱う際に男子と女子を分けることも、できるだけ生物の授業においては行われるべきではないであろう。この本来特に衛生上の教授にとって、例えば月経〔が始まる〕前に必要な男女別の形態は、それぞれ同性の教員や他の教育指導者によって、例えば、自由ドイツ青年団やピオニールグループの午後の時間という形態で行われるのが、もっともよい」(S. 745)。

### (3) 子どもの性的関心の発達

Sende (1966) は、「研究グループ性教育ハレ (Arbeitsgruppe Sexualerziehung Halle)」が体系的な性的教授プラン作成のために都市にある学校の第4～8学年生徒の性的関心の発達に関して行った調査研究にもとづいて、ここでは第5～7学年の生徒の性的関心の発達を報告している。その調査によると、この第5学年段階での男子の質問例として、次のものが挙げられている(S. 748f.)。

#### 第5学年男子の質問例

1. 身体構造と生殖器への質問
  - a) 男性の身体はどうなっているの？ b) 人間には何本の骨があるの？
  - c) 腸の厚さと長さはどれくらい？
2. 自分の性的発達への質問
  - a) ぼくは今後どう発達するの？ b) なぜ男性は子どもが産めないの？
  - c) いつから男性は産ませることができるの？
3. 異性の発達への質問
  - a) いつから女子は子どもを産むの？ b) なぜ女性の身体構造はそんなに強くできていないの？ c) なぜ女子には月経があるの？
4. 受精への質問
  - a) 子どもはどうやってできるの？ b) なぜ何人かの女性は子どもを産まないの？
  - c) 生命の素 (Grundstoff) で受精はどう行われるの？
5. 妊娠への質問
  - a) 妊娠ってなに？ b) 妊娠はどのくらい続くの？ c) なぜ妊婦を驚かせてはいけないの？

6. 出産前の発育への質問

- a) 子どもはおなかの中でどう育つの? b) 一度に何人子どもが育つことができるの?  
c) どうして、男の子と女の子が産まれるの?

7. 出産過程への質問

- a) 以前には多くの女性が亡くなったの? b) なぜ女のひとは赤ちゃんを産むのに病院へ行くの? c) 最初の間はどこでどのようにして生まれたの?

8. 新生児への質問

- a) 赤ちゃんってどんななの? b) 赤ちゃんのあたまには毛がもうあるの?  
c) お母さんにミルクがない時には、なにから赤ちゃんは栄養をとるの?

a) は質問の一般的表現, b) 質問の具体的な表現, c) 質問の特殊な表現

これに対して、女子では 2 つの領域での質問例が挙げられている (S.749).

第 5 学年女子の質問例

異性の発達への質問

- a) なぜ男性は違う性なの? b) 男性は子どもを産むのにどんな貢献をするの?  
c) なぜ男性は強い体格なのに子どもを産まないの?

自分の性的発達への質問

- a) いつから女子は大人になるの? b) 女子はからだに、いつからどれくらいの子どもの素をもつ? c) いつ月経は始まるの、そしてなぜはじまるの?

その結果、第 5 学年では男女の性的関心領域は表 6 のようにまとめられている。

表 6 : 第 5 学年生徒の性的関心 (%)

性の領域	質問総数に占める割合	
	女子	男子
身体構造と生殖器	12.1	9.3
自分の性的発達	7.2	3.9
異性の発達	7.8	10.5
受精過程	10.1	14.5
妊娠	9.9	6.6
出産の経過	21.0	20.8
新生児	19.1	22.5
出生前の発達	12.8	11.8
質問総数	486	408
質問人数	252人	242人

(出所 : Sende 1966, S. 749.)



ここからもわかるように、第5学年では男子と女子の関心はほぼ似たような領域、すなわち受精過程、妊娠・出産、新生児などに向けられている。ただ異なるのは、男子は異性の発達に対して関心があるのに、女子では自分の性的発達に関心が向いている点である。

第6学年になると、Sendeによると質問は量、質ともに増える。男子の質問は受精過程、異性の発達および新生児に集中し、女子では、月経の過程に集中する。何人かの女子はすでに生理がありそれを質問するし、他の女子はそれがまだ来ていないので不安で質問する。第7学年になると、男子は11の性領域の性的な過程・現象の原因と関連を知りたがり、しばしば性的概念の内容に関する質問が出される。さらに男子では、世界観的および社会政策的な性格をもつたくさんの重要な性の質問が出てくるが、それは男子が現存する道徳的規範に従おうとしているからである。こうした質問の典型例として、Sendeは以下の質問を挙げている (S. 749f.)。

1. 僕たちの年ではまだクラス仲間の女子を彼女にしてはいけないの？
2. なぜ何人かの女子には子どもがいるのに夫がないの？
3. なぜ彼女をもつと、大人はしかるの？
4. なぜ親は人間についての質問に答ええないの？
5. なぜ何人ものクラスの女子は妊娠した女性教員の陰口を言うの？
6. なぜ大人自身ひどい表現をするのに、ぼくたちがそう言うとしかるの？

また、11の領域に関する典型的な質問例は以下のとおりである (S. 750f.)。

#### 11の性領域に関する典型的な質問

1. 身体構造と生殖器に関する質問
  - a) 男性の生殖器は何というの？ b) 睾丸って何？そしてどんな仕事をするの？
  - c) オナニーはペニスに害があるの？
2. 自分の性的発達に関する質問
  - a) 何歳で性的に成熟するの？ b) 人のもととは誰なの？
  - c) なぜ今日猿が発達しても人間にならないの？あるいはなぜ神様は人間を創ったの？
3. 異性の発達に関する質問
  - a) 生命で重要なのは男なのそれとも女なの？ b) 女子には何のために生理があるの？
  - c) なぜ何人かの女子にはこしけがあるの？それってなに？
4. 受精に関する質問
  - a) 受精ってどのように行われるの？ b) なぜ人間には人工授精がないの？
  - c) 91歳の女性でもまだ受精できるの？
5. 妊娠に関する質問
  - a) 妊娠の期間はどのくらいなの？ b) なぜ僕たちの国は妊婦を支援するのに資本主義国家はしないの？ c) なぜアフリカの女子では妊娠がもう11歳半ではじまるの？

6. 性行為に関する質問
  - a) 男と女はどう愛し合うの? b) 性交ってどうするの?
  - c) 性交での男性の最も美しい感情ってなに (どうか詳しく)?
  - d) 包皮 (Männerschut) って何の役に立つの?
7. 性病に関する質問
  - a) 僕たちの国は性病に対してどうしているの? b) 淋病以外にどんな性病があるの?
  - c) 男性と女性はどのようにして性病にかかるの?
8. 出産過程に関する質問
  - a) 子どもはどのようにして産まれるの?
  - b) 出産にはどのくらいかかるの? そして医者と助産師さんは何をすべきなの?
  - c) 2000 年前の子どもたちはどのようにして産まれたの?
  - d) なぜ僕たちのところでは無痛出産のためにそこまでするの? それで出産で少数の女性は死なないの?
9. 新生児に関する質問

これに対して、女子の性的関心は第 7 学年でも身体的な成熟過程に特に影響を受けている。これまで女子は生理の原因と過程を知りたがっていたのに、今ではとくに、月経時の衛生と適切な行動について知りたがる。これに関する質問例は以下のとおりである (S. 751)。

1. 生殖器のケアはどうしなければならないの?
2. その日の間は体育をしていいの?
3. なぜ生理の間は泳いではいけないの?
4. その日の間女子としてどうふるまえばいいの?
5. 月経の間適切な衛生には何が必要なの?
6. なぜ生理でお腹や背中が痛むのに、授業中の課題をしなければならないの?
7. 生理のための適切な脱脂綿はなに?

また、女子には社会政策的な性格をもつ性の質問が出てくるが、そこでは仲間、友情、愛、英雄と自由といった概念がかなりの役割をはたしている (ebenda.)。

1. 私たちの国には自由があるのに、なぜ母親は自分が望むことを自分の赤ちゃんにすること (中絶のこと——引用者) ができないの?
2. 本当の愛はどこに示されるの?
3. 真の英雄ってだれ?
4. 私たちの年でもう彼氏をもっているの?
5. なぜ女性は子どもを持つ意志がない時に、子どもをおろしてはいけないの?

さらに女子は、何人かの男子の性的問題に対する行動について不満を表明している。次のよう

な例が挙げられている (ebenda.).

1. なぜ男子は、私たちが生理の理由で体育をしないと、私たち女子の陰口をいうの？
2. なぜ男子はよく性に関してひどい表現をするの？
3. なぜ男子は私たちのところに来るとそんなに乱暴なの？
4. なぜ何人かの男子は、私たちのおっぱいをつかもうとするの？
5. 男子が妊婦のことを笑うのは、失礼じゃない？

以上をまとめると、第7学年では、男女生徒の関心領域は表7のようになっている。

以上のような調査結果から、Sende は次のように総括している (S. 751f.). 第1に、生徒の性的関心が学年の進行につれて量的に増えていく。第4学年では人間のセクシュアリティの7領域で152人の男子が110の一般的な性の質問をしていたのに、第5学年になると性の質問は具体的で時には特殊なものにすなり、その数も244人の男子、408の質問と増えている。さらに第6学年以降は11領域に広がる。また、女子と男子の性的関心も個々の学年段階で特定の性領域に集中するし、またこの学年内部でも特定の重点に集中するから、教員は性領域から教材選択をする際には、年齢段階ごとに社会的に必要な知識を特定化していく必要がある。第2に、個々の生徒には、特定の狭く限定された性的関心の固定した時期というものはない。したがって教員によってさまざまな組織形態、方法およびやり方が性的教授では用いられねばならない。第3に、生徒の性的関心は、学年が進むにつれて量的にいっそう発達する。女子と男子からは第6学年まではたくさんの一般的な質問が出されるが、その質問が後には具体的になり、最後には特殊になり繰

表7：第7学年生徒の性的関心 (%)

性の領域	質問総数に占める割合	
	女子	男子
身体構造と生殖器	23.1	13.9
自分の性的発達	17.6	6.5
異性の発達	6.8	14.6
受精過程	12.4	14.2
妊娠	13.0	10.4
出産の経過	11.1	6.7
新生児	6.8	8.4
出生前の発達	7.0	5.6
性的逸脱	3.8	1.2
性行為	1.0	15.2
性病	0.0	0.9
質問総数	849	729
質問人数	253人	246人

(出所：Sende 1966, S. 751.)

り返されてくる。第 4 に、性的教授の重点は、第 7 学年にある。というのもこの年齢の女子と男子は最も多くの質問を持っているからである。その際注意すべきなのは、とくに性・愛情生活と必ずしも直接には関連していないような世界観的および社会政策的な質問に関心が向けられてくることである。

#### (4) Erich-Weinert 上級学校での性教育実践

Bach (1966) は、第 1 回研究会議での報告 (Bach 1962) の続編として、Hohenmölsen にある Erich-Weinert 上級学校 (20 クラス、生徒 640 人、教員・教育者 35 人) での 1960 年以後の性教育実践を報告している。Hohenmölsen は住民 6500 人で、親は主に中部ドイツの褐炭鉱地帯の褐炭工場、Leuna と Buna の化学企業や農場で働いており、2 つの上級学校、1 つの特殊学校 (Hilfsschule)、2 つの幼稚園がある地域である。

Bach たちは最初の数年、主に中・上級段階学年の生徒と親への取り組みを行なっている。そのきっかけは、アンケート調査からいまだ一度も自分の親と性的な問題について話したことがない生徒が、第 7・8 学年で 20%、第 5・6 学年で 10% 弱もいたからである。これらの学年の親委員会との話し合いの結果、次のようなことがわかってきた。「自分のためらい、過去の教育の欠陥、好都合な機会でも遠慮してしまうことが、親を、彼らに解決できないと思わる窮地に追いやっていた」(S. 755) のである。そこで教員と学年の親委員会は、第 7 学年から 10 学年の学年親集会で、出席している親に全面的な性教育の必要性を納得させようと、青少年の心理的発達と心理的状況について述べ、加速化の現象を取り上げ、これらの学年の生徒が出した質問を読み上げ、授業内での性的問題の取り扱いについて話し、教材範囲を挙げて、教員の方法を説明した。たいていの親は、学校での包括的な性教育に賛成してくれた (ebenda.)。第 2 回の親セミナーでは、Bach たちは教材集を提示して、親に講演の形で男性と女性の生殖器、個体発生に関する生物学的知識を伝達し、流産問題、青少年とアルコール問題、性病と避妊を取り上げているし (S. 756)、その後、第 5・6 学年の親と話し合いを持っている。

これらの親セミナーと並行して、Bach たちは、最初の数年、第 6～10 学年の生徒対象に生徒の催しを開いている。その際、生物学教室のドアにある「郵便ポスト」に集められた質問カードを通じて、子ども・青少年の関心がどこにあるかを突き止めている。その質問の内訳をまず匿名での質問と記名での質問との割合でみると、前者の割合は、1961/62 学年度から 1964/65 学年度の 3 月にかけて減ってきている (1961/62 学年度 75.7% 1962/63 学年度 47.4% 1963/64 学年度 34.6%、1964/65 学年度 3 月 22.5%)。次に学年ごとの質問数とその推移をみると、表 8 になっている。

この表 8 から、次のことが指摘されている。多くの質問は第 7 学年から出されており、性的な関心が 13 歳でとくに強くなっていること、また早い時期に性的問題の取り扱いが始められれば、質問頻度の減少がその後の学年で起こること、さらに遅く話し合いがなされても第 10 学年までは性的問題に対する関心は比較的高いこと、第 9 学年で行われている教材領域「生殖

第3回性教育研究会議と共同研究グループ「性教育学」の設立

表8：学年ごとの質問数の推移

年度 学年	1961/62	1962/63	1963/64	1964/65.03	計
6 学年	40	-	16	7	63
7 学年	11	89	178	8	286
8 学年	9	86	16	95	206
9 学年	12	6	50	6	74
10 学年	6	68	12	27	113
計	78	249	272	143	742

(出所：Bach 1966, S. 756.)

器官と人間の個体発生」はすでに第8学年で包括的に取り扱わねばならないこと。このことは、Bachによれば、生徒の一部が第8学年以降には学校を去るし、職業学校ではこの領域が教材プランでは考慮されていないから、ますます必要なのである (S. 756)。生徒の質問を問題領域ごとにまとめ、個々の学年段階に配分したものが表9である。ここでは以前の他調査との比較も載

表9 領域と学年段階ごとの生徒の質問 (%)

質問テーマ	6 学年		7 学年		8 学年		9 学年		10 学年		8 学年 1925 (Seeling) n=43	8 学年 1950-1956 (Grimm/ Rösler) n=789	8 学年 1927 (Hodann) n=44 +	8 学年 1950-56 (Grimm/ Rösler) n=835 +
	n=													
1. 身体構造と生殖器官	15.4	27.4	0.6	6.9	23.4	14.5	5.8	2.5	-	-	5.0	4.7	25.0	5.3
2. 自分の発達	9.6	-	9.5	7.6	2.9	5.8	13.6	5.0	1.7	-	56.0	16.7	23.0	15.8
3. 異性の発達	9.6	18.1	3.6	8.6	-	7.3	-	2.5	-	-	2.0	4.1	2.0	4.4
4. 受精と性行為	17.4	36.5	10.7	19.6	-	31.9	9.6	5.0	3.4	28.2	14.0	16.2	18.0	17.8
5. 妊娠の知識, 避妊, 中絶	15.4	-	2.4	2.6	16.8	-	2.9	7.5	41.5	5.1	-	4.4	-	4.4
6. 月経, 月経衛生	3.8	-	19.0	1.8	3.7	-	5.8	-	5.0	-	-	-	-	-
7. 性病その他生殖器官の病気	-	-	4.8	6.0	2.2	4.3	5.8	15.0	6.7	21.0	2.0	8.5	5.0	8.3
8. 出生前の発達, 妊娠経過と妊娠衛生	-	9.0	17.9	13.7	-	15.9	11.6	5.0	-	-	7.0	16.6	-	16.4
9. 出産過程, 早産と流産	1.9	9.0	15.5	9.3	16.8	-	19.6	5.0	1.7	-	5.0	20.5	16.0	19.7
10. 新生児, 奇形も	1.9	-	3.6	4.2	16.8	-	-	-	25.0	-	-	8.3	4.0	7.9
11. マスタベーション, 売春および変質	-	-	0.6	1.8	3.7	17.4	2.9	40.0	-	24.5	-	-	-	-
12. 社会的成熟・承認, 男女関係(愛, 友情)	21.1	-	10.1	11.0	13.0	-	22.4	12.5	13.3	7.5	-	-	-	-
13. その他の質問	3.8	-	1.7	6.9	0.7	2.9	-	-	1.7	3.7	9.0	-	7/0	-
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

(出所：Bach 1966, S. 758.) なお、Seeling, Grimm/Rösler, Hodann のデータについては、Grimm/Rösler 1957, 参照。

せられている。

この結果について、Bach はこうまとめている。第 6～8 学年の女子は、男子よりも多くの質問をしているが、Grimm/Rösler と同様に、その原因はこの年齢段階における成熟テンポの違いにある。しかし、第 9～10 学年では男子と女子は同数の質問をしている。第 6～7 学年では、Grimm/Rösler が第 8 学年用の典型的な質問としているのと同じ質問が大体出されている。第 8～10 学年の男子はとくに性行為、マスターベーション、売春、性病に関して多く質問しているが、これに対して同学年の女子は妊娠の知識、避妊、新生児、生物学的成熟と社会的成熟とのずれ、およびそれと結びついた青少年の中間的地位に関して、とくによく質問している。麻薬および性犯罪に関する質問もまたしばしば出てくる。それから、男女はまた薬（サリドマイド）や放射線による胚障害ならびに腫瘍の病気に関して質問している（S. 756f.）。第 8～10 学年男子の典型的な質問は、以下のとおりである（S. 757）。

オナニーで病気になることがあるの？  
自慰は処罰されるの？  
なぜぼくたちのところでは売春宿が禁じられているの？ぼくたちの港でも？  
他の国には売春宿があるの？社会主義諸国にもあるの？  
早いセックスは害があるの？  
毎日どのくらいセックスできるの？  
正しいセックスを学ばねばならないの？  
そのための本は買えるの？  
なぜレスピアンのおは罰せられないの？16歳の女性を誘惑する女性には罰せられるの？  
麻薬をやるとつねに死ぬの？どのような麻薬があるの？なぜぼくたちのところにはないの？  
子どもとの淫行って何なの？でも第8学年の女子は子どもじゃない！  
街角の女ってなに？

また、女子では以下の典型的な質問が挙げられている（ebenda.）。

確実な避妊手段ってあるの？  
妊娠しない日のある月経ってまったく確実なの？  
なぜ多くの女性は、それを望まないのに、そんなにすぐに子どもを産むの？  
月経がないのは妊娠の徴候なの？  
16歳でもう性的関係を持っていいの？  
男性が私たちに誘惑すれば、その人は罰せられるの？  
14歳以下できちんとしたボーイフレンドがいると、教護院に入れられるって本当？  
第8学年の女子といちゃつくと、男子は罰せられるの？  
いつから固定したボーイフレンドをもっていいの？

友情と愛情との境界ってなに？

第10学年で婚約しているの、あるいはその場合放校処分を受けるの？

学校ではたいていの先生は私たちを大人のように扱うのに、家や街では愚かな子どものように扱われる。先生は親とこのことについて話すことができないの？

ボーイフレンドは女子より2、3歳年上であるべきなの？

いつから公然と一緒に歩いていいの？

私たちは学校から夕べに映画館や青少年のダンスパーティーに行っているの？

Bach たちは、その後、こうして出された質問だけではなく、すべての性的問題を体系的に生物の授業で扱っている。月経と月経衛生は追加的に女子の体育授業で、マスターベーションは男子の体育授業で、男子と女子との関係に関する質問、ならびに社会的問題は、ドイツ語と歴史の授業で、これらの教科の適切な授業教材と結びつけて扱われている (S. 759)。しかし、出された質問に授業では答えることができなかったため、特別の生徒の催しその後2度開かれ、また第10学年では女子の希望で別の集まりがもたれている。それは、郵便ポストに「多くの男子は、女子が全く望まないのに、セックスするようせかすことがどうして起こるの？」という質問のメモが入っていたことに関わったものである。

そこで次のすべての男女が集まる集会で、Bach たちは「快 - 不快 - 原則 (喜び 苦しみ 原則)」、不快感情を克服するための性衝動の発生とそれが個人と種にとって持つ意義というテーマに取り組んでいる。そこでは、動物の衝動的な行動に、「自己教育、自己の意志にもとづいて自分の衝動を支配できないしは生かす人間の意識的行為」を対置し、男女に「生物学的成熟と社会的成熟との違い」や、「各人が自分、パートナー、偶然に生まれる子、および社会に対して持つ責任」(S. 759) を意識させている。さらに、性衝動を満足させるために女子の抵抗を乗り切ろうとする多くの男性の「スタンダードなトリック」(永遠の大きな愛の約束、恐喝、愛の証明の要求、偽って同情を手に入れる、説き伏せる、アルコール) について話されている。これによって生徒にセックス・エロスを拒むことが意識され、「まず社会的成熟、次に愛、次にパートナーの長い吟味、次にセックス」(S. 759) という認識が獲得されたという。以上のような生徒との話し合いを検討する中で、将来は毎年第8~10学年の生徒とこの問題を話し、成人式準備の催し (Jugendstunden) \* と自由ドイツ青年団 (FDJ) の活動の枠内で午後の催しを行うことが決められている。

\* 14歳の男女の成人式 (Jugendweihe) への参加者がそのための準備に集う催しのこと (Wolf 2000, S. 110)。

1964/65 学年度には、下級段階とゼロ学年児童の親に関する活動が取り組まれ、幼稚園児の親とも話し合いが行われている。ドイツ民主女性同盟 (DFD) が国民戦線\* と提携して組織した都市居住区での講演でも、Bach たちの取り組みが支援され、Bach の学校に通っていない親や、学

校の生徒の祖父母や親戚などにも話されている。さらに、報道をつうじて郡のますます多くの市町村から性教育に関する講演の希望が出された。その結果、1961年から1965年3月までに郡の2553人の市民、そのうち青少年816人がBachの講演を聴きに來たし、郡の教育・医学研究グループメンバーのSeifarth博士の講演には、約350人の市民が参加した(S. 760)。こうして、1964/65学年度には教育協議会で、性教育についての以下の決まりが学年作業プランへと採りいれられている(ebenda.)。

1. 全学年の最初の親の催しでは、学年主任の説明の際に性教育の問題も取り上げる。当該学年段階の典型的な生徒の質問を挙げて、正しい解答を述べる。事実伝達と価値伝達の統一という原則に特別な価値をおく。
2. 第4~6学年すべてにおいて、親に「あなたの子どもにどう言う？(Sagst Du's Deinem Kinde?)」の映画を上演する。それに続いて、親と学年を土台にしてセミナーを行う。
3. 7学年すべてに、性教育に関する親セミナーを開催する。その際とくに人格発達にとってのこの発達段階の意義を取り扱う。第2部では、現在の教材を説明し、教科の教員が親に生物学的知識を伝達する。
4. 第8~10学年すべてにおいて、親に映画「私はもう子どもじゃないから……(Weil ich kein Kind mehr bin...)」を上映する。引き続き各学年で、セミナーを行う。その際とくに友情と愛、アルコール、マスタベーション、ちゃんとした日常計画、余暇づくりを取り上げる。よく出される次のような質問には統一的な見解に達するようにする。夜は何時まで外出できテレビを見ていいか？映画にはどのくらい行っていいのか？いつダンスのレッスンに行き、いつから公のダンスパーティに行きいいのか？パーティはどのように催されるべきか？キャンプはいいのかいけなないのか？私はどんな服装をきちんと着るのか？おこづかいはいくら？日々のお手伝いとその報酬は？
5. 2月までに各学年主任はそれぞれの家庭を訪問して、親と性教育の問題についても話す。親セミナーに來ない親には、親役員会メンバーと一緒に訪問する。
6. 生徒の質問とこの質問に関わる親の意見は、校長に生かされるように伝える。
7. すべての教科で、性教育用の適切な教材領域を利用し、それを教材配分プランにおいて特徴づける。同僚教員もみな、さらに性教育に最も適切な教育状況を利用する義務を負う。
8. 下級段階のための決まり。

\* DFDとは、DDRで政党や大衆組織から独立した唯一女性に開かれている大衆組織(Wolf 2000, S. 43)。国民戦線とは、民主ドイツ国民戦線(Nationale Front des demokratischen Deutschland)の略称で、DDRのすべての階級と階層を労働者階級とその党(ドイツ社会主義統一党; SED)の指導のもとにまとめた大衆組織のこと(ibid., S. 150, なおWeber 1988 = 1991, p. 58-59参照)。



### 3. 親に関する活動

#### (1) Brückner の親向けの取り組み

Brückner (1966) によれば、近年 DDR では性教育の諸問題をめぐる議論がかなり活性化している。しかし、この議論は主に思春期とその後の年齢段階の諸問題に取り組んでいて、教育的・方法上の諸問題にはたいていは不十分にしかあるいはまったくといっていいほど触れていないし、その議論にはこれまで指導的な立場にある人民教育省のイニシアティブがまったく見られない (S. 771)。そこで Brückner は、「言葉の最広義の意味における性的諸問題に対する態度は、とりわけすでに妊娠、出産および子づくり (Zeugung) に関する子どもの質問に対する最初の答えの仕方で行われる」(S. 771) という見地から、そしてまた 4~9 歳の間に出されるこれらの質問は親に向けられているのに、わずかな親 (せいぜい 10~20%) しかこれらの質問に答えていないという事実から、これらの事柄に関する明確な知識を親がもつようにする親向けの説明書を作成し試行している\*。

\* すでに Brückner (1962) で親向け説明書案が示されている (ただし未見)。

Brückner によれば、すでに 1959 年に最下級年齢グループ (4~9 歳) 用の説明書を構想し、人民教育省当局 (郡・県・国家レベル) に呼びかけたが、当局は具体的な最初の一步を進めようとはしなかった。その後 Brückner (1962) の公表後、Grimma 郡 Kossern の上級教員 (Oberlehrer) である Fritsche がこの提案を採り上げてくれたおかげで、Grimma 郡教育指導センターを介して、この説明書を印刷して、Grimma 郡、Wurzen 郡および Leipzig の都市部のほんの一部で 1963 / 64 学年度に親に出すことができた (S. 772)。その後、他の郡でもこのような活動が始められ、1964 / 65 学年度には県レベルでの最初の大規模な試行が可能になり、今日に至っている。Brückner は親向けの説明書に関わって、以下の 4 つの質問について無作為抽出調査を行っている (S. 773)。

あなたは本説明書を読む前に、子どもの適時で正しい性的教授を必要だと考えていましたか？ (教育的態度)

あなた自身は自分の子どもやあなたに委託された子どもから出された質問に、はじめから本当のことを明確に答えましたか？ (実践的行動)

あなたはこの説明書で提供された指摘があなたの教育的任務に役立つと感じましたか？

あなたはこのような説明書で不快な気分がしましたか？

その結果、以下のことが明らかになっている (S. 773f.)。 については、親の 65.3% が「はい」と答えている。都市部では 76% なのに対して、農村部では 62% である。 については、53.4% が

「はい」と答え、33.2%が「いいえ」としている。この「いいえ」に6.4%のあいまいな態度と7%の無回答を付け加えると、44.6%となる。回答における都市部と農村部との違いは、質問よりももっと顕著で、都市部では67.6%が「はい」と答えているのに対して、農村部では49.4%となっている。また、親の24.3%は、で「はい」と答えているのに、では「いいえ」と答え、葛藤を示している。については、「はい」が全体の80%。ここでも都市部と農村部との間に違いがみられる（都市部88.7%、農村部77.4%）。この結果についてBrücknerは驚きを示している。というのもで親の53%が子どもの質問にははじめから本当のことを明確に答えたとしているのに、80%の親がこの説明書を役立つとしているからである。については、14.6%が「はい」と答えて不快を示している（都市部4.2%、農村部17.5%）。

次に4つの質問に対する回答を職業別（労働者、被雇用者および知識人）でみると、では労働者38%、被雇用者21.8%が「いいえ」と答えている。については、「いいえ」と曖昧な回答との割合がすべてのグループでひじょうに大きくなっている。職業別でみると、農村での勤労者は「いいえ」がもっとも強く（44%）、教育職では「いいえ」はもっぱら幼稚園教員からのものである。については、すべてのグループで肯定がきわめて高い。最後に、親が表明した懸念と反論として、以下のようなものが挙げられている（S. 774f.）。

1. これによって不健康な好奇心が引き起こされないか？
2. 多すぎる知識は刺激的で誘惑的に作用しないか？
3. 述べられている年齢段階はあまりに早すぎはしないか？
4. なぜそこまでするのか？こんなことはみんな自明だ！こんなことは誰もわれわれに言ったことがないが、それでもわれわれは大きくなったし、愚かにもなっていない。
5. 学校は本来そういうことのためにあるのではないのか？学校のほうがわれわれ親よりもこれをもっとうまくできる。
6. それについて話すことは私には不快だ。
7. この叙述はあまりに即物的だ。恥じらいへの教育はどこにあるのか？
8. 性的な教授は従属的な意味しかなく、問題は全体的な教育だ。

## (2) Grasselの親向けの取り組み

Grassel (1966e)によれば、Grassel (1966c)の結果から、家族における性教育の不十分な現状の原因は、一方では性問題に関する会話はいやらしい (anstößig) とする古い社会的タブーの余波であるとともに、他方では、たいいていの親が自分の青年時代に適切な性教育すら受けてこなかったことにもある (S. 763)。今日多くの親は若者を性的関係の諸問題にも準備させることが必要であるとは分かっているが、どうそれを実践的に始めたらいいか分からないから、援助を求めている。

そこで必要な助けとなるのが、親向けの説明書である。この説明書はG. Ockelによってはじめて使用され、Brücknerによって受け継がれたもので、Grasselはこのアイデアを採用して、固

有の説明書を（しかも年齢段階ごとに）つくっている（それが Grassel 1966f, 1966g, 1966h である）。Grassel は学校での試行で親への取り組みを以下のような手順で行っている（S. 764）。

学年始めに、学年の親の集いで説明書を親に手渡し、親に性教育の必要性を説明する。約3~4週間後に第2回の親の集いを行う。ここでは子どもの年齢段階ごとに親を集めて、それぞれ「異性との出会い」シリーズの映画を上映する。すべての全鑑賞者を前にした短い討論の後、学年でもう一度性教育の必要性と可能性を話し合う。その際、経験のある親に積極的にこの議論に入ってもらふ。この集まりで、親に、学校は遅くとも4週間後に子どもの質問には責任逃れの返事をしないことを伝える。それまでに、親自身が子どもの信頼を得るために、性教育を始めることが勧められる。学校がこの課題を引き受けようとすると、多くの親はほっとして責任から解放されたと思込むことがあるので、親の協力は性教育の成功の必要な前提であることを親に強く示す。

なお、参考までに Grassel の親への説明書（Grassel 1966f）を以下に紹介しておく。

#### 4~10歳の年齢の子どもの性教育に関する親向け説明書

親御さんへ！

私たちの任務は、わが子を人生へと準備させることです。それには、子どもが異性に正しく出会うことができるようにさせることも入ります。私たちがそうしなければ、後になってわが子は、私たちが彼らをこの重要な人生問題で放っておいたと言って私たちを非難することになります。

たいていの親は、子どもに性教育をすることが必要だとわかっています。にもかかわらず多くの親がそうしないとすれば、それはしばしば、彼ら自身が若い時に正しい方法で啓発されたことがないので不安に感じているせいです。さらにまた少なからずの親は、子どもとこのことについて話すのに不適当な気後れがあります。

わが子は、はじめから自分の周りを見て、当然それからまたすぐに男女の関係や子どもの出自に関心を持ちます。

私たちは親ならば恥ずかしがらずに、わが子が周りのこの領域を知ることを助けましょう。

もっとも、何人かの親は、子どもを啓発するのが学校の仕事だと思っています。これは誤りです、いったい私たちはすでに就学前に子どもたちとこのような問題について話さなければならないのですから。

私たちが子どもを性教育し性的に啓発しても、子どもから無垢を奪いませんし、彼らの〔性に対する——引用者〕好奇心をそそるわけでもありません。しかし私たち教育者がしないぶん、それを他の「啓発者」がします。ですから、私たちが子どもをもっともよく助けるのは、彼らを適時にかつ正しく性関係の問題へと準備させる時なのです。

私たちは性教育する際に1つのことを心に留めておきましょう。子どもの質問は明快さと知識を得ることを目指しているということです。しかしそれらはたいていは早すぎる性的関心の表現だととらえられてしまいます。

私たちは性教育をどう行うべきか？

これがもっともよくできるのは、私たちがそれを何か特別なものだと見なさずに、むしろ人格の全面的訓育の一部として行う時です。

そこでは私たちのモデルと実例が大きな役割を果たします。さらにまた私たちは個々の質問について情報を与えなければなりません。ですが、ただ事実を伝えるだけでは十分ではありません、私たちはこの事実をも価値評価しなければなりません。つまり、私たちは子どもに、この事実が何を意味しているか、そしてどうきちんと行動しなければならないかを言うのです。

私たちはわが子に何を言うべきか？

私たちが言うことはみな、子どもの理解に合うように言われなければなりません。それは明解で真実であるべきですし、男女関係は恥ずかしくないものだと言うべきでしょう。しかし私たちは知識を伝えるだけでなく、また子どもが後になって人生の勝手がわかるように援助すべきでしょう。

たいてい子どもは自分から質問をもって親のところに来ます。でも子どもが質問しなくても、あなたは子どもと話すための良い機会を利用したりつくり出します。私たちが子どもの質問に答える時に、「早すぎる」ということはありません。私たちはその際にわかりやすく表現しさえすればいいのです。しかし「遅すぎる」ほうが、私たちの教育活動全体を疑わしいものにすることがあります。

わが子は何に関心があるのか？

10歳までは、子どもに関心がある質問は3つです。この3つの質問を私たちは知っておいてその答えを用意しておきましょう。私は、あなたにその回答例を与えようと思います。

第1の質問「子どもはどこからくるの？」

この質問は4歳と6歳の間に予想されます。

私たちの回答：「子どもはお母さんのおなかで、しかも自分で息をし飲むことができるまでの間育ちます。お母さんのからだのなかで子どもは保護され、お母さんのもとでともに飲んだり息をします。これは、お母さんの血液を通して行われますし、この血液を通じて子どもは必要な栄養をとります。」

第2の質問「いったいどうやって子どもはそこからでてくるの？」

この質問は私たちは5歳と7歳のあいだの子どもで考えています。

私たちの回答：「あなたは子どもがお母さんのおなかで育つことをすでに知っています。子どもは十分大きくなり一人で飲んだり息をすることができると、もうお母さんのおなかにいる必要がなくなります。」

子どもは、私たちが膣と呼ぶ小さな通り道を通して母胎から出てきます。この通り道はゴム管のようなもので、子どもが出てくると広がります。これが子どもの出産です。子どもは両足の割れ目から出てきます。この割れ目はすべての女性にありますし、女の子にもあります。お母さんは出産の際には当然相当がんばらねばなりません。でも、お母さんはね、自分の子どものために喜んでそうします、というもお母さんは子どもを楽しみにしているのですから。」

第3の質問：「子どもはもともとすでにその前にお母さんのからだの中にいるの？」

よく子どもは違ったふうにも質問します。「いったい赤ちゃんはどうやってお母さんの中へ入ってくるの？」と。(しかしその場合子どもは子どもがその前にどこにいたのかを知りたいだけなのです.)

この質問を私たちは6歳から考えなければなりません。

私たちの回答：「子どもはお母さんのからだの中で育ちます。最初は全く小さくて、ピンの頭ほど小さいの。それからゆっくりだんだん大きくなって、9カ月後に生まれてきます、それからほんものの赤ちゃんほど大きくなります。

子どもは、お母さんの体内にいる間は、まったくやわらかで子どもに何も起こらないように子どもを守る袋のなかにいます。約4カ月後に、子どもはもう動くことができますし、子どもが蹴るのを感じることもできます。

もちろん妊娠とよぶこの時期にはお母さんはたいへんです。ですからこのような女性に対してはとくに親切にして、重たいものを持たねばならない時には、いつも助けることにしましょう。」

あなたが子どもにこれを具体的な物で見せることができれば、子どもにこの回答をわかりやすくします。『女性百科事典』には、そのために利用できる図があります。

一般的に私たちは、子どもが9歳までには質問を通じて基本的知識を獲得したと考えることができます。

子どもが突然質問してきた時にとまどわないように、あなたがこれらの回答をよく準備しておくことを大いにお勧めします。子どもがある不適切な場所で(市電などで)このような質問をしてきたら、この質問には家で答えるわ、と子どもに言うのがいいでしょう。しかしその場合もできるだけ同じ日にしなければなりません。とくにそれに適切なのは私たちの経験では夕暮れ時です。

子どもが自分のきょうだいの裸を見ることができる機会を与えれば、それによって子どもを助けることができます、そして子どもが自分の父親や母親が自然なままでいるのを見ても、叱ってはならないでしょう。でもこうした事態を完全には避けることができません。しかしまた、子どもが「なぜおなかがそんなに大きいの?」「なぜそんな毛があるの?」などといった質問をいできて来たら、子どもにきちんとした答えをしなければなりません。でもしかれば、子どもの[性に対する——引用者]好奇心を目覚めさせることになります。

もっともよいのは、子どもに一度家族や知人の妊娠をとともに知る機会を与える時です。あなた

は落ち着いて子どもを [妊娠の——引用者] 準備に参加させましょう (子どもの洗濯物を整理する, 乳母車を買うなど)。多くの人びとは, かつて母胎の子どもの動きを感じるのを許された時, ひじょうに感銘を受けたと私に語ってくれました。

#### わが子がひどい言葉を使う

多くの子は, 4歳から, 消化領域に関する口汚ない言葉を好みます。7・8歳ごろには, 私たちは, 子どもが性的な罵り言葉や口汚ない言葉を家に持ち込んでくることを考えておかねばなりません。ひじょうによく子どもはこれらの言葉が本来何を意味しているかを全くきちんとは知りません。ですからあなたの子どもを叱ってはいけません。むしろ, これは美しい言葉でなくて使っ  
てはいけないことを子どもにわからせましょう。

#### 次の年齢では発達はどうなっていくのか?

あなたが, 発達がその後どうなるかを知っているとしても, きっと間違いではありません。

10歳ごろ私たちは第4の質問, すなわち, 「もともと子どもはどうやってできるの?」という質問を考えておかねばなりません。今や子どもは生殖の問題を知りたがるし, 私たちは父親がどのような役割を果たしているのかをも言わねばなりません。

(この質問への答えは説明書Bにあります。)

今日およそ12歳で, わが子は思春期に入ります。そのとき多くの問題が青少年に気にかかり始めますので, それに対して私たちは親として彼らを準備させなければなりません。その際, 学校はきつとあなたの働きかけを支援します。

お子さんがあなたに学校の出来事を話してくれれば, どうか先生と落ち着いてそれについて話してください。家庭と学校が共同で相談し働きかけあうことは, おそらくつねに教育の成功の最善の前提となります。

私たちは次の時にはなおこのテーマ領域に関する親の夕べを行い, そこですべてのオープンな質問について議論します。

すべてのこうした質問の助けは, 特に親向けに書かれた小冊子にありますし, 私たちはあなたに以下のものをお勧めします。

Bretschneider: Sexuell aufklären - rechtzeitig und richtig: Urania Verlag.

Grassel: Wie sagen wir es unserem Kinde? Verlag Volk und Gesundheit, Berlin 1956.

Grassel/Heilbock: Erziehung zur künftigen Liebe; in dem Büchlein: „Eltern und Kinder“, Verlag Volk und Wissen, Berlin.

Klimova/Fügenerova: „Wie wir die Fragen der Jüngsten beantworten“, Berlin 1960.

Prof. R. Neubert: „Woher kommen die Kinder?“, Greifenverlag Rudolstadt 1964.

(3) Wolf の親調査

衛生医師である Wolf (1966) は、親による性教育の重要性と必要性という見地から、自分の子どもの性教育に対する親の態度、親の性知識などを調査している（調査は、Bad Dobern の都市部、人口約 13,000 人の Rostock 県の郡庁所在都市で、320 人、160 組の夫婦に行われた）。その際、「自分の子どもを性教育する特定の問題において親がとる態度は、親の年齢および——それとともに——子どもの年齢によっても、また問題の知識の程度にもよる」という作業仮説にもとづいて、親が 4 つのグループに分けられている（表 10）。

表 10 全無作為抽出調査内の割合（160 組の夫婦）

グループ	A		B		C		D	
子どもの年齢	-		6 歳以下		6 ~ 13 歳		13 ~ 19 歳	
親の年齢	30 歳以下		26 歳以下		26 ~ 38 歳		38 ~ 50 歳	
グループ								
回答した夫婦数 ( / )	20	20	20	20	20	20	20	20
回答した夫婦数 (A-D)	40		40		40		40	

\* グループ の親は、性教育の諸問題の基本知識を前提とする職業（教育者、医師、学童保育士等）に従事している親。（出所：Wolf 1966, S. 765.）

この調査結果は、以下のとおりである（S. 766-768）。

回答したすべての夫婦は例外なく自分の子どもの性教育の必要性を肯定しているが、それは子どもの性教育を自分で引き受ける用意という意味ではなくて、性教育が必要だという認識においてである。

自分が子ども・青少年期に受けた性教育の程度に関して、被験者の 20%のみが十分だったとみなしている。グループ A・B の若い親とグループ C・D の年長の親を比較すると、前者では 26%ないしは 31%が自分の受けた性教育を十分だとみなしているのに対して、後者では 13%ないしは 10%となっている。

性教育の諸問題に対する情報提供に関しては、4 つの年齢グループのうちグループ B が有意に高い。被験者全体では親の 16%が性教育の諸問題についてもっと知ろうとしているのに、グループ B では 28%となっており、また 6 歳以下の子どもを持つ親は性教育の問題と直面している。教育グループ別でみると（と）、グループ では回答者の 90%以上が、子どもの質問に答えるには自分のこれまで得た情報が十分だと回答しているのに対して、グループ では 75%となっている。

親に有用である情報源としては、本 76%、専門的な講演 40%、特別な相談所 16%となっている。

性教育の方法に関する質問では、相変わらず回答した親の 31%が「コウノトリのお伽話」が誕生の出来事に関する幼児の質問には適切な説明だとしている。この問いにはグループ とでは明白な違いがみられ、前者では 43%、後者では 19%となっている。また、比較方法（人間の

誕生の出来事と動植物の繁殖との比較)の賛否に関する質問では、被験者の83%がこの説明形態に賛成している。

親の約40%は、子どもの性教育では生物学的事実の知識伝達を重視すべきだと考えており、性教育でとくに愛と結婚への教育を考えるべきという親は60%となっている。その際にグループとには顕著な差がみられることから、性教育は生物学的事実のたんなる知識伝達に限られてはならないことを親に示す必要がある。

いわゆる「性のうわさ話 (Aufklärungsgesprach)」に関しては、グループとできわめて有意な差が出ている。前者でこれに賛成するものが39%なのに対して、後者では11%となっている。被験者全体では親の25%がこの見解に賛成しているが、75%は、子どもの質問にはつねに質問内容と子どもの理解力に応じて答える方がいいと考えている。

原則的に子どもが親の裸を見てはならないということに、親の46%が賛成している。この質問では年齢グループの差が確認され、身体の自然的なとらえ方は年長の親よりも若い親のほうに強い。しかし顕著な違いはグループとにある。前者では63%が賛成しているのに、後者では賛成は30%しかいない。

幼児期のオナニー遊びと思春期のマスタベーションに関して、親の48%は、幼児が性器を弄んでいるのに気づけば、幼児に害があるとか下品であることに気づかせるとしている。マスタベーションの質問には、80%が回答している。親の31% (グループとでは極めて有意差があり、では51%、では14%)は、これを性的なものの過剰な強調とみなし、そこから生じる身体的毀損をおそれて、こうした行動を禁止しようとするとしている。親の手に入りやすいたぐさんの出版物では、思春期に一時的に行われるマスタベーションでは健康を害するおそれがないことが書かれているにもかかわらず、こういう結果になっている。

男女の恋人関係 (およそ第8から10学年の時期における) に関して、親の3分の2はこの年齢での恋人関係を肯定的にとらえている。そのうち19%はこの関係を大目に見ており、49%はボーイフレンドやガールフレンドと知り合いになろうと努めている。3分の1はこの年齢での恋人関係を拒否しており、親の13%はこの関係を権威主義的に禁止によって阻もうとし、19%は子どもにそれを思いとどまるよう助言するとしている。グループとで極めて有意な差がでている。前者では賛成と反対が同程度となっているのに、グループでは肯定的態度が優勢である(86%)。

性教育をする際の知識伝達の時期の年齢基準。被験者全体では、子どもは次のような年齢段階で、以下の問題についての情報を与えられるべきだとしている。

男女の違い, 外生殖器の名称	6歳
妊娠	8歳
出産過程の出来事	12歳
受精	12歳半



成熟問題（二次性徴の発達、月経等）	12歳
性交	14歳
性的異常と性病	14歳
避妊	16歳

Wolfによれば、親の考える年齢基準は、とくに「男女の違い」では明らかに子どもがこれらの問題と取り組まねばならない年齢段階よりも遅くなっている。重要な差はグループとで、平均的な差はほぼ2年あり、後者の親は知識伝達の時期をもっと年齢の低いほうに置いている。女子と男子とに分けて調査した年齢基準には重要な違いはないが、「成熟問題」に関しては、女子には1年早くこれらの問題を熟知させるとなっている。また、異性愛的な関係での最低年齢に関しては以下のような平均値（親が許容する最低年齢）が示されている。

男女間の青少年の恋人関係	16歳
初体験	19歳
結婚	21歳半
第1子	23歳

ただし、男子と女子で親が許容する最低年齢の差は異なり、恋人関係と初体験では約1歳男子が高いし、結婚と第1子に関しては、平均して2.5歳男子のほうが高い。

自分の子どもの性教育の担い手については、まず回答した夫婦すべてが子どもの性教育での親の積極的な関与に賛成している。1夫婦のみが父親に性教育の能力があると見なしており、19%は母親が子どもの性教育をまずもって引き受けるべきとしている。また、親の32%は父親が息子と、母親が娘と話し合うことでこの課題を分かち合わねばならないと考え、48%はそれと一緒に行動することを望んでいる。親が家庭外の性教育の担い手としてみなした施設は、学校が0.76の相対的頻度で指導的なポジションを占めており、続いて医師（0.48）、講演と質問の時間（0.44）、本（0.44）および他の人物と施設（0.01）となっている。

子どもの性的な危険として、親の90%以上が医師を挙げている。

最後にWolfは、総括的に、ほとんどすべての質問に出てくるグループとの差から、(a)性教育に対する積極的な態度はまずもってそれに関する知識を伴うこと、(b)したがって親に対して目標を定めた知識伝達が重要であることを指摘している。

#### 4. 性教育への医学の貢献

この分野では、50年代からすでに性的啓発で活躍していたNeubertやBretschneiderらが報告している（ただし、Neubertは当日の会議には病気のため欠席し、その原稿が代読された）。

(1) Neubert と Bretschneider の医学貢献論

Neubert (1966) は性教育 (学) の歴史を振り返りつつ、医学の性教育 (学) での今日役割を論じている。Neubert によれば、20 世紀前半までは性教育 (学) において医師が中心的役割を果たしていた「性教育 (学) 医師の支配の時代」であったが、それ以降は、もはや「性教育 (学) は医師の職業任務ではなくて、普通教育の任務」(「教育学の任務としての性教育 (学)」)(S. 777) となっている。また性教育 (学) については、「性教育 (学) はなんら固有の教科ではなくて、教育全体の部分領域でしかない、ないしはもっと鋭く言えば、特別の視点のもとで考察された教育全体である」(S. 778) としている。

そして最後に、Neubert は、性教育 (学) に対する医学の重要な貢献は、必要な知識を広範な圏域へと伝えることであるが、そのためには以下のことが改善される必要があると考えている (ebenda.)。 (a) 「医師全体がこれまで以上に、性行動の生物学的、医学的、衛生学的基礎を研究すること、および(b)これまでこの領域は「あれやこれやの思春期医や産婦人科医の趣味」で「体系的な研究」はなされてこなかったのを、これを克服すること。Neubert は医師自身の啓発の必要性を次のように述べている。「やや荒っぽく言えば、われわれはまずもって人間のセクシュアリティ、人間の生殖、人間の結婚と家族、最後にわが後代を異性に対してならびに結婚においてきちんとした行動ができるように教育すること、という複合全体についての医師の啓発を必要とする」(ebenda.)。

婦人科医である Bretschneider (1966) は、医師と教育指導者の立場から早期の性的活動に明確に反対し、物議をかもしている。Bretschneider によれば、十分価値のある性的活動のためには、生物学的成熟ばかりではなく心理学的成熟が必要であるが、「性格の発達のある程度の完結、倫理的世界観の形成、性的なものの領域においてももつ責任能力」で特徴付けられる後者は、18 歳以前で達成されるのはきわめてまれである。それゆえ、「早期の性交と早期の妊娠は、青少年期での、したがってまた未完成の心理的成熟の段階での性交と妊娠として定義されうる」(S. 783)。

これに対して、「心理的成熟はパートナー間の真の愛情関係の前提であり、正しいパートナー選びの前提」(ebenda.) となるものである。「心理的成熟がようやくパートナーに対する十分な責任感情をもたらす、というのも彼はパートナーのうち十分に同権的な人間を見、その人の関心・願望・欲求は自分のそれと同じ価値を持つからである。心理的成熟はまたようやく芽生えつつある生命と子どもに対する十分な責任をもたらす。心理的成熟はまた倫理的態度にとって、そして社会的な必要性の認識にとって必要である」(S. 784)。

Bretschneider によれば、青少年期に男女間の関係に至ることがあるが、そこにあるのは、たいていは「思い込みの愛 (Verliebtheit)」だけで、これはまだ真の愛の心理的前提を持たないし、まだ自己中心的であり、それには感情の深さと持続性がないし、信頼と忠実さはまだ「負荷実験」には耐えられない。そしてこう結論付けられる。「一般的にこの年齢 (およそ 15 歳まで) の青少年は、恋人関係を数年にわたって純粋に精神的なレベルで維持する成熟を持たない」(ebenda.)

と。また早期の性交については、女子の危険のほうが男子のそれよりもずっと大きいとして、妊娠と出産のもとでの事故や、女子の生殖器がもつ高い病気素因や心理領域での高い障害可能性を挙げている。

この Bretschneider の早期性交反対論は、編者の Grassel によれば、「生き生きした議論」(S. 786) を引き起こした。Bretschneider がとりわけ「否定的な発達可能性」を強調したことは「威嚇」の教育学だとして反対にあった。また、「青少年」が危険期とすることも不適切であると批判された。「危険は発達に条件づけられているのではなくて、むしろ青少年期に生じる諸問題に対する教育的準備の不十分さの表現として理解されねばならない」(S. 786)。

## (2) Paul の結婚への準備教育

Paul (1966) は、結婚相談所の経験から、性教育の不十分さをこう指摘している。医学的な教授で眼を閉じてならないのは、「われわれのところでは教えられた若者の多数が生物学的知識のたんなる伝達に関してすら、自分の後の性的パートナーシップへと十分な準備を受けていないという事実」(S. 789) である。その例として、青少年の間での望まない妊娠を挙げ、その大きな理由は、「受精過程に関する教授がたいへん図式的にかつ不当な控えめな態度で行われていること」にあるとしている。Paul によれば、「適切な時期に客観的かつ科学的に明確に、精子の形成・排出や卵成熟と月経に関するすべての生理学的過程が語られねばならないだけでなく、最大限と最小限の受精可能性を挙げて [月経——引用者] サイクルとその段階の理解が達成されねばならない」し、「加速化を考慮して、およそ 17~20 歳の若者に、個人的ケースにおいてもすでに早くから避妊の手段と方法の知識が伝えられねばならない」(ebenda.)。

ところが、拡大上級学校の教員の一部は、今でも婚前の性的活動について自分の学年生徒とのまじめな会話や個々の生徒との会話すら拒否しているという。Paul によれば、数年前までは指導的な産婦人科医ですら、すべての最初に生まれた嫡出子の約 75~85% が婚前にできたという事実にもかかわらず、婚前性交はけっして規範 (Norm) とみなされてはならないと主張し、避妊について教えることは習俗の一層の野性化を後押しすると主張していた。だとすれば、こうした教員の古臭い見解は驚くにあたらない。そこで、「われわれが初夜までの純潔を、今日なおわが性的陶冶・訓育のライト・モチーフとして認めたいのか、そしてまた認めてよいのかどうかという問い」と取り組む必要がある。Paul は、「この世間離れや、あるいはもっとよく言えば青年に対する偽善は、彼らを葛藤に陥れるだけで、大人に対する信頼を妨げ、彼らが信頼と真の友情との上に打ち立てられた異性とのよき関係へと誠実にかつ自然に入り込んで成長することを妨げる」(S. 789f.) ものだと激しく非難している。

Paul もまた、性教育における男女共学、とくに結婚できる年齢の若者の性教育での男女共学の意義を強調している。Paul にとって重要なのは、「両性の前で一緒に、結婚が、一般的な振る舞いにおいて相互の尊重と考慮を必要とするまじめに受け止めるべき一つの課題として語られること」であり、また「われわれ大人がわれわれの経験と生理学の知識から、身体的結合の際の性で

異なる興奮過程について語ること」(S. 790)である。

その上で、Paulは男性青少年における性教育の必要性を重視している。というのも、「男性のみが自分の衝動生活を満足させさえすればよく、女性ではそんなことは問題にならないという、いまだにほぼ浸透している世間一般の意見」が、結局のところ、結婚を損ねるような見解、「脱線・浮気 (Seitensprung)」(ebenda.)を生み出しているからである。Paulによれば、青少年が男女一緒に、どのように月経、妊娠、出産と産褥が女性・女子の職業や日常での生活を支配しているかを経験し、そこで教育(学)的・情動的なモメントを巧みに利用すれば、医学的・生物学的な知識伝達と同時に「調和した結婚への教育」にもなる。「男子は、女子に対する騎士道精神と進んで助ける気持ち、生物学にもとづく不可欠な要求であり続け、結婚においても当てはまるものでなければならぬことを学ぶ。そして男子は同時に、おそらく彼らの人生で初めて、女性が自分の生物学的任務以外に職業・社会上男性と同等の義務を果たさねばならない時に、どのような達成能力(Leistungen)が女性に求められるかを経験する。社会主義社会の不可欠な特徴である男女同権は、こうしてすでにまずは単なる医学的な教授(Unterrichtung)によって、深い社会的な意味を獲得する」(ebenda.)。Paulによれば、こうした現実主義的な教育にもとづいてのみ、「婚前に子どもができたなら「結婚しなければならない」という誤った俗物的な(spießbürgerlich)道徳」を克服することができるし、「婚前性交の禁止というアナクロニズムな見解」(ebenda.)をも克服することができる。

今日最大の困難は、Paulによれば、「どこまで青少年はモデルに従うことができるのか」(S. 791)という問いである。一方では、親は自分自身の子どもに性教育ができないが、その原因は親の不十分な性知識や古いブルジョア的見解への囚われにある。しかし他方では、若者は今日もなお自分の将来のパートナー関係という決定的問題についての理性的で包括的な客観的な教授を受けていないし、また親の結婚が安定していない時、それがモデルにならない時には、社会主義原則に適った明確で自然な結婚への態度ももてない。こうして、「社会主義的家族・結婚関係への教育ないしは準備」(ebenda.)も、教育学の指導のもとでの全社会の任務でなければならぬ、とされる。

### おわりに—— 本会議の成果と共同研究グループ「性教育学」の創設

Grassel(1965)によれば、第3回の会議の中で、性教育の領域でのこれまでの協力のあり方はもはや現在の要求に応じていないことがわかった。そこで「さまざまな専門分野の代表者が属する研究グループ「性教育学」(S. 766)をつくることが提案され、人民教育省に対して、このグループづくりを支援し、このグループを学術協議会(Wissenschaftlicher Rat)と関係づけるよう要請がなされた。このグループの仕事は、第1に、性教育の領域での研究活動を調整し指導することであり、第2に性教育の原則的な諸問題を解明することであり、第3に、教員研修などの講習で、「あらゆる段階の教員を性教育の実施へと準備させること」(ebenda.)とされている。

る。

また Grassel は、「この第3回研究会議でもって DDR における性教育学の発展の最初の段階が完結した」(ebenda.)と総括している。Grassel の評価によれば、この第1段階は、「多かれ少なかれゆるい結びつきで活動・研究してきた多くの実践家と科学者の個人的イニシアティブ」によるものであった。しかし、次の新たな段階では、共同研究グループの設立によって「性教育学の領域での理論的・実践的研究の目標を目指した、継続的で重点化された指導」(ebenda.)がなされねばならない。すなわち、性教育の研究と実践はこれまでは個人的に行なわれてきたが、次の段階では集団的な取り組みが継続的にかつ重点的になされねばならない、というのである。

こうして、1966年1月に人民教育省の学術協議会のもとに「共同研究グループ性教育学(Forschungsgemeinschaft Sexualpädagogik)」\*がようやく創設されることになり、そこにはさまざまな専門分野の学校実践者と実践的に活動する医者と並んで教育学、心理学、医学、哲学・倫理学および法学の科学者たちが参加した(BzgA 1995, S. 27)。Bach (1991)によれば、その設立のイニシアティブを取ったのは、Grassel と Borrmann であった。「Grassel と Borrmann はイニシアティブをとり人民教育省学術協議会に、国際的水準との結びつきが失われるべきでないとするれば、「共同研究グループ性教育学」が設立されねばならないことを説得した」(S. 232)というのである\*\*。

\* Grassel (1966b) では、Arbeitsgemeinschaft "Sexualpädagogik"となっている (S. 711)。

\*\* なお Brückner 1968, S. 10 も参照。

Grassel (1966a) によれば、この共同研究グループは以下の5つを任務\*としている (S. 701)。

- ・ 研究活動のコーディネートと指導
- ・ 教授プラン作りに影響を及ぼすこと
- ・ 授業用視覚教材の作成
- ・ 教員むけの研究材料の作成
- ・ 継続教育の催しの実施と教員養成の研究プログラム作りへの影響行使

\*なお、BZgA (1995) によれば、共同研究グループ「性教育学」の目標は次のようなものとされている (S. 28)。

- ・ それまで分散して行われていた研究活動のコーディネートと助言
- ・ 教授プランの作成に影響を及ぼすこと
- ・ 教員・保育者養成も研究プログラムの作成に影響を及ぼすこと
- ・ あらゆるレベルの医学・法学・文化・国家学の専門教育へ性教育学の講習を取り入れることの提案 (Anregungen)
- ・ あらゆるレベルの教育(学)者とすべての部門の実践者たち向けの継続教育講義を行い支援すること
- ・ 教材の作成
- ・ 教育(学)者、親、子ども・青少年向けの文献の出版

こうして、この共同研究グループは、まず第1に、「必要な研究企画や、さらにまた認められた学問的認識を教育制度で実践的に適用する可能性に関する論争と対話のフォーラム」(Bach 1991, S. 232)となった。第2に、新しい教材・教育映画の勧め、親研修の勧め、教授プラン・教科書・教師用授業補助教材の内容上の仕上げ、子ども・青少年向けの性教育実用書が、このグループにおいて協議され、人民教育省に送り届けられたりした (ebenda.)。

その1例を挙げれば、「共同研究グループ性教育学」は、Bachが作成した提案を人民教育省へ送付すると同時に、「結婚と家族」部門のRostockの研修デーをきっかけに詳細なプログラムの特別版を参加者に配ったりした。しかし、人民教育省は非協力的で「人民教育省の指令と通達 Verfügungen und Mitteilungen des MfV」という形での公的に印刷された「勧告」は出されることはついぞなかった。ただ、このプログラムは、DDRでは「ホーエンメルゼン・モデル (Hohenmölsener Modell)」として広まり、後には、「学校性教育学のDDRモデル」として1968年の国際シンポジウムで紹介されていくことになる (BZgA 1995, S. 29)。

第3に、BRD、スカンディナヴィア諸国、スイスとオーストリアならびに社会主義諸国の著名な科学者との旺盛な国際的な経験交流が始まり、それが国際シンポジウム「結婚と家族への準備としての性教育」(1968年)に結実することになる (Bach 1991, S. 232)。

第4に、この共同研究グループは、他の委員会での法案審議の際に責任をもって協力している(家族法、教育法、青少年法、刑法、結婚・性相談所の活動指針など) (ebenda.)。

最後に、この共同研究グループの重要な任務領域は、県・郡での大学週間や個々の催しという形態での専門コースによって、教育学学生の専門教育および教員の継続教育を行うことにあった。保健衛生省の医学協会や、法・国家・文化科学者たちも、この共同研究グループの支援で継続教育(研修)デーを開催している (ebenda.)。この1例が結婚・性相談の諸問題についてのRostock研修会議\*であろう。

\* 結婚・性相談の諸問題についての第3回ロストック研修会議が1967年10月23日~25日に、「家族計画における医者の任務と共同責任」の標語のもとで開かれているが (Mehlan 1968)、第1回と第2回の会議については未見である。

#### 【引用・参考文献】

- Bach, Kurt R. 1962: Erfahrungen aus der Zusammenarbeit von Schule, Elternhaus, Betrieb und Jugendorganisation bei der geschlechtlichen Erziehung. In: *Pädagogik*, Beiheft 2, 1962, S. 57-59.
- Bach, Kurt R. 1966: Erfahrungen aus der praktischen Arbeit an der Erich-Weinert-Oberschule Hohenmölsen. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*. 15 Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 755-761.
- Bach, Kurt R. 1991: Zur Entwicklung der Sexualpädagogik in der DDR. In: Hohmann, Joachim S. (Hrg.): *Sexuologie in der DDR*. Dietz Verlag Berlin, S. 228-238.
- Baer, Heinz-Werner 1962: Unterrichtsmethodische Probleme bei der Geschlechterziehung in der Schule. In: *Pädagogik*, Beiheft 2, 1962, S. 37-45.
- Baer, Heinz-Werner 1966: Die Geschlechterziehung im Biologieunterricht. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*,

- Heft 7/8, S. 741-746.
- Bittighöfer, Bernd 1965: Sozialistische Geschlechtsmoral und Erziehung der jungen Generation zu sittlich wertvoller Partnerschaft. In: *Pädagogik*, 20. Jrg., Nr. 9, S.791-800.
- Bittighöfer, Bernd 1966: Probleme der sozialistischen Geschlechtsmoral und der Erziehung der jungen Generation zu sittlich wertvoller Partnerschaft. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 721-731.
- Blome, N./Popp, E 1964: Die Einstellung der Lehrerschaft zum Problem der Geschlechterziehung in der Schule. Rostock, unveröff. Examensarbeit.
- Borrmann, Rolf 1966a: Jugend und Liebe. Urania-Verlag, Leipzig/Jena/Berlin.
- Borrmann, Rolf 1966b: Gegenstand, Aufgaben und Gestaltung der sexuellen Bildung und Erziehung. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 733-738.
- Bretschneider, Wolfgang 1956: Sexuell aufklären- rechtzeitig und richtig. Urania-Verlag Leipzig/Jena/Berlin.
- Bretschneider, Wolfgang 1966: Gefahren des frühzeitigen Verkehrs und der frühzeitigen Schwangerschaft. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 783-787.
- Brückner, Heinrich 1962: Entwurf eines Merkblattes für Eltern als Beitrag zur geschlechtlichen Aufklärung und Erziehungsarbeit in der Schule. In: *Ärztliche Jugendkunde*, 53. Jrg., 7/8, S. 187-192.
- Brückner, Heinrich 1966: Welche Möglichkeiten und Schwierigkeiten bestehen gegenwärtig für die Zusammenarbeit von Schule und Elternhaus bei sexuell-pädagogischen Aufgaben im Kindesalter? In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 771-776.
- Brückner, Heinrich 1968: Das Sexualwissen unserer Jugend. VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, Berlin.
- Bundeszentrale für gesundheitliche Aufklärung (BZgA) (Hrsg.) 1995: Familienplanung und Sexualpädagogik in den neuen Bundesländern. Eine Expertise im Auftrag der BZgA von Harald Syumpe und Konrad Weller unter Mitarbeit von Lykke Aresin, Kurt R. Bach, Jutta Resch-Treuwerth, Eduard Stapel. Köln.
- Grassel, Heinz 1965: "Geschlechterziehung in der sozialistischen Schule" In: *Pädagogik*, Nr. 8, 1965, S. 762-766.
- Grassel, Heinz 1966a: Zur Einführung. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 701.
- Grassel, Heinz 1966b: Zur Tätigkeit der Arbeitsgemeinschaft "Sexualpädagogik" In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 711-713.
- Grassel, Heinz 1966c: Voraussetzungenm Bedingungen und Effekte der Geschlechterziehung. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 715-720.
- Grassel, Heinz 1966d: Geschlechterziehung in der Unterstufe. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 739-740.
- Grassel, Heinz 1966e: Die Arbeit mit den Eltern - ein Beitrag zur Geschlechterziehung der herwachsenden Generation. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 763-764.

- Grassel. Heinz 1966f: Merkblatt A für Eltern zur geschlechtlichen Erziehung der Kinder im Alter von 4 bis 10 Jahren. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 813-815.
- Grassel. Heinz 1966g: Merkblatt B für Eltern zur geschlechtlichen Erziehung der Kinder im Alter von 10 bis 14 Jahren. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 815-816.
- Grassel. Heinz 1966h: Merkblatt C für Eltern zur geschlechtlichen Erziehung der Kinder im Alter von 14 bis 18 Jahren. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 817-818.
- Grassel, H/Baer, H. W. 1962: Einleitung. In: *Pädagogik*, Beiheft 2, 1962, S. 2-3.
- Grimm, Hans/ Rösler, Hans-Dieter 1957: Kinder fragen nach dem Geschlechtsleben. In: *Das aktuelle Traktat*, 2. Reihe, 2. Heft, Greifenverlag, Rudolfstadt 1957.
- Kirsch, Werner 1962: Einige Vorschläge zur Verbesserung der sexuellen Belehrung im Biologieunterricht. In: *Pädagogik*, Beiheft 2, 1962, S. 46-48.
- Kirsch, Werner 1964: Vorschläge zur Durchführung der sexuellen Belehrung im Rahmen des derzeitigen Lehrplans. In: *Biologie in der Schule*, Heft 3, 1964, S. 102-106.
- Kirsch, Werner 1968: Zum Problem der sexuellen Belehrung durch den Biologielehrer. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin.
- Mehlan, Karl-Heinz. 1968: Arzt und Familienplanung. Tagungsbericht der 3. Rostocker Fortbildungstage über Probleme der Ehe- und Sexualberatung vom 23. bis 25. Oktober 1967 in Rostock- Warnemünde. VEB Verlag Volk und Gesundheit, Berlin.
- Neubert, Rudolf 1966: Der Beitrag der Medizin zur Sexualpädagogik. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 777-781.
- Paul, Elfriede 1966: Geschlechtererziehung als Vorbereitung auf die Ehe. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 789-791.
- Sende, Johannes 1966: Zu den Sexualinteressen der Schüler der Klassen 4 bis 8 und ihre Berücksichtigung in der sexuellen Belehrung. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 747-753.
- Trummer, Klaus (Hrg.) 1966: Unter vier Augen gesagt. Verlag Neues Leben, Berlin.
- Weber, Hermann 1988: DIE DDR 1945-1986. R. Oldenbourg Verlag, München= 1991 H・ヴェーバー 『ドイツ民主共和国史「社会主義」ドイツの興亡』 斎藤哲・星乃治彦訳, 日本経済評論社
- Wolf, Dietrich 1966: Die Einstellung der Eltern zur Geschlechtererziehung ihrer Kinder. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 765-769.
- 池谷壽夫 2011a: 「1950年代におけるDDRの性問題と性教育——「性的啓蒙」から「性教育」へ」, 『日本福祉大学子ども発達学論集』(日本福祉大学子ども発達学部)第3号, 2011年1月, pp.21-44.
- 池谷壽夫 2011b: 「1960年代におけるDDRの学校・青少年・家族政策と性教育」, 『日本福祉大学社会福祉論集』(日本福祉大学社会福祉学部)第124号, 2011年3月, pp.1-26.
- 池谷壽夫 2011c: 「科学的知識普及協会研究報告会議と性教育研究会議——1960年代DDRにおける性教育の動向(その1)——」, 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』(日本福祉大学福祉社会開発研究所)第124号, 2011年9月, pp.27-58.